

# 天和二年刊『和国名所鑑』所引の和歌について

附 影印、翻刻、略注

田野 慎 二

はじめに

天和二（一六八二）年刊『和国名所鑑』は、菱川師宣の名所絵四十図を見開きで大きく載せ、頭書にそれぞれの名所に関する解説を記した作品である。多くは、解説の末尾に、和歌または発句を添える。

上中下の三冊に分かれ、その内訳を国別に整理すると、

上巻…十五図 陸奥（松島、宮城野）

相模（鴨立沢、江之島、金沢）

武蔵（亀井戸筑紫天神、角田川、六江橋、

品川沖、駒掛堂、観世音寺・忍岡・

渋谷（金王櫻）

安房（野島崎）

常陸（桜河）

中巻…十二図

山城（祇園午頭天皇、清水寺堂、嵯峨、広沢池、

愛宕、吉田、新黒谷、三十三間堂、八幡、

鳥羽恋塚）

撰津（布引瀧）

安藝（宮島）

下巻…十三図

天和（長谷寺、三輪大明神、吉野、興福寺、

南都大仏、猿沢の池、手喰門、二月堂、

春日町、南円堂、般若寺）

撰津（住吉岸松、天王寺）

\*（ ）内は、各図中のキャプションから適宜抜粋。

キャプションがない場合は、頭書の解説文より作成。

となる。

「和国」と冠しながら、全国の名所が広く選ばれているわけではない。上巻は、武蔵国の名所を中心とした十五図、中巻は、山城国の名所を中心に十二図、下巻は、大和国の名所を中心に十三図で、江戸、京、奈良の名所を取り立てたものである。寺院や神社など宗教的な名所・建造物が多いのも特徴の一つであろう（1）。

師宣の挿絵は、見開き一図で横長。たとえば、上巻巻頭では、横長の構図を活かし、瑞巖寺を中心とした松島湾海岸沿いの島々を手に大きく描く。

頭書は、名所の風景描写、宗教的な名所・建造物に関する記述のほか、土地の人々の暮らしや旅人に思いを馳せたり、和歌的な事跡に触れたりする場合もあり、その内容は多岐にわたる。

このように、『和国名所鑑』は、名所の選定方針や師宣挿絵の工夫、頭書の記述内容などさまざまな問題を孕む作品であると考えられる。本稿では、本作品の特徴を明らかにする第一歩として、頭書に引用された和歌に焦点を絞る。和歌の多くは、解説末尾に地の文と区別して配置され、いわば、最後に名所を印象づける役割を担わされているようだ。本稿は、『和国名所鑑』における所引和歌の特徴や利用の実態を具体的に検討しようとするものである。

なお、『和国名所鑑』の伝本は、天和二年刊本、元禄九年刊本、刊年不明本が知られているが、本稿では、Gallicaで公開されているフランス国立図書館蔵の天和二年刊本の画像を利用した(2)。稿末に、影印・翻刻・略注を掲げたので、参照されたい。

## 一 引用和歌の概要

先ずは、『和国名所鑑』頭書部分に引用されている和歌の概要をまとめておこう。

全四十図に対して頭書で和歌を掲載しているのは、

上…十一図十一首(全十五図中)

中…九図十首(全十二図中)

下…九図十二首(全十三図中)

で、各巻おおよそ七割前後の図の頭書に和歌の引用が見られる。

先に触れたとおり、和歌が引用される位置は、頭書の最後の部分が多く、改行して行頭を下げ、一目でそれと分かるように置かれる。

例外は、下巻の【吉野】の、

やまとの國よしの山といひしは、我てう一のさくらの名所也。三月中  
じゆんの比は、山谷もあらしに花ちりしきて、山も白々見えければ、  
ある人のうたに、みやこにてめづらしく見るはつ雪はよしのの山には  
やふりにける、とよみしごとく、花のちる比、風にふきちらしたるけ  
しき、散まよふ花のよそめはよしの山あらしにさわぐみねの松風、と  
よみしもことほり也。

とある二例のみである。この二首は、それぞれ、

宮こにてめづらしと見るはつ雪はよしのの山にふりやしぬらん

(拾遺・冬・源景明・二四三)

ちりまがふ花のよそめはよしの山嵐にさわぐ峰の白雲

(新古今・春下冬・藤原頼輔・一三二)

のことであろう。和歌の全体が、「ある人のうたにくとよみしごとく」「よとよみしも」と引用であることが明示されているので、今回は、用例として加えた。なお、上巻の【六江橋】で、

しゆびよくほうかう相つとめ国元へ行人あり。たび立によき日成とて、  
あまぞらをもいとわず、江戸を立て品川へゆく比は、かみな月ふりみ  
ふらずみさだめなき時雨をさそふ折なれば、しきりにあめふりきたり  
て、行きさもみわかず、行人あり。

とあるのは、

神な月ふりみならずみ定なき時雨ぞ冬の始なりける

(後撰・冬・読人不知・四四五)

に拠ることは明らかだが、引歌と見なし、これらは今回は除いた。

さて、所引和歌三十三首にはほとんど出典等の記載がない。そこで、『新編国歌大観』『近世和歌撰集集成』『狂歌大観』等を用いて調査したところ、細かな異同は見られるものの、二十三首については、出典、他書所伝などが確認できた。また、九首については、元になった歌(原歌)があり、その一部の字句を意図的に改変しているようだ。後者については、『和国名所鑑』編者らによる、いわば二次創作であり、厳密には、出典とは言えないが、密接に関わる和歌として、同様に考察したい。【表1】に、所引和歌三十三首の出典等の状況を示す。

【表1】から窺える、『和国名所鑑』所引和歌の特徴は次の三点である。

- 1、和歌の出典等としては、『新古今集』が全体で十五首と多い(上巻に集中。十首)。……『新古今集』の多用
- 2、当該の名所名が詠み込まれていない「非名所歌」の例が上巻を中心に十三首ある。うち、『新古今集』が十首と多い。……『非名所歌』の活用
- 3、原歌に対して大きな異同のある例が、九首ある。うち、『新古今集』が七首と多い。名所名を改変するほどの意図的な改変が想定される事例もある。……改変

これらの点について、次節以降、順次検討を加えたい。

## 二 『新古今集』の多用

和歌の出典等を各巻毎に整理すると、以下のようになる。『新古今集』を出典等とする

	上	中	下	計
古今集	0	1	3	4(12%)
後撰集	0	1	0	1(3%)
拾遺集	0	1	2	3(9%)
詞花集	0	0	2	2(6%)
千載集	1	0	0	1(3%)
新古今集	10	4	1	15(45%)
新後拾遺	0	1	0	1(3%)
永久百首	0	0	1	1(3%)
山家集	0	0	1	1(3%)
(狂歌)	0	2	2	4(12%)

例が際立って多く、特に、上巻は、その傾向が強い。その次に多いのが、『古今集』だが、その差は歴然。また、八代集で全例の約八割を占める。十三代集は、『新後拾遺集』の一首のみ。しかも、それは藤原良経の歌であり、結局、平

安く鎌倉初めぐらいの和歌(歌人)から選ばれているのである。

ところで、『新古今集』と他の和歌との場合では、その利用の仕方が大きく異なる点も注目される(ただし、狂歌は、色合いが異なるので除く)。後者の場合を、『古今集』の四例で確認してみよう。

以下の四首の古今歌が、【京八幡】(中巻)、【三輪大明神】、【手喰之門】(以上、下巻)で引用される。

【京八幡】女郎花うしとみつゝぞ行過るおとこ山にしたりとおもへば

(古今・秋上・布留今道・二二七)

【三輪大明神】三輪の山いかに待みむ年ふともたづぬる人もあらじと思

へば

(古今・恋五・伊勢・七八〇)

【手喰之門】あさみどり糸よりかけてしら露を玉にもぬける春の柳か

(古今・春上・遍昭・二七七)

【手喰之門】春日のゝ飛火の野守出て見よいまいくかありてわかなくつみ

けん (古今・春上・読人不知・一八、⑤わかなくつみてむ)

【京八幡】では、石清水八幡宮のある男山、【三輪大明神】では、大神神社のある三輪山を詠み込んだ名所歌が選ばれている。「手喰之門」は、転害門すなわち「東大寺西北の惣門」(大和名所図会)のことである。頭書では、この門の説明は早々に切り上げ、奈良の都の

「山谷野草の多ん見(遠見)」の光景を記述する。「春日のゝ」歌は、その一例として選ばれたようだ。一方、「あさみどり」歌は、京の西寺の脇にあつた柳を詠じた歌(詞書「西大寺のほとりの柳をよめる」)で、元々奈良の都の歌ではない。頭書、挿絵には、柳の記述、描写は見られない。なぜこの歌が選ばれたのか判然としないが、名所名が詠み込まれていないことを恃んで、奈良の都の春景の一齣として、著名な遍昭歌を援用したものと考えておく(3)。

いずれにせよ、『和国名所鑑』所引古今和歌については、三首は、当該の名所に相応しい名所歌が選ばれている。加えて、『新編国歌大観』所収の『古今集』本文と較べて、名所名が異なるほどの大きな異同がないという点も確認しておきたい。そして、これらの特徴は、『新古今集』以外の他の和歌の場合には、概ね当てはまるのである。

それでは、節を改めて、『新古今集』を出典等とする場合の特徴の一つである、「非名所歌」を利用した例を検討しよう。

### 三 「非名所歌」の活用

作品の性格上、頭書に引用する和歌は、当該名所を詠み込んだ名所歌が庶りも良く、編集作業も簡単だ。

たとえば、下巻巻頭【住吉岸松】は、挿絵では、住吉大社の太鼓橋を中心に、海岸の松や神殿などを描く。頭書では、住吉大社の地理的な説明をした後で、謡曲「白楽天」に見える白楽天来日説話を記す。そして、太鼓橋や鳥居に触れた後で、最後に、

君が代の久しかるべきためしにはかねてぞうへしすみよしの松

と、名所歌を引用して終わる(4)。これは、

後三条院住吉まうでによめる

きみがよのひさしかるべきためしにやかみも<sup>う</sup>ぬけむ<sup>す</sup>みよしのまつ

(詞花・賀・読人不知・一七〇)

のことで、恐らくは異伝の一つなのだろう(5)。

八代集だけでも、「住吉」「松」を詠み込んだ歌はおよそ七十首もある。『類字名所和歌集』といった名所和歌集の類いを利用すれば、候補作を探す作業はそれほど難しくくない。

ところが、『和国名所鑑』では、十一もの名所において、非名所歌が引用されているのである。煩を厭わず、掲出してみよう(狂歌の三首は除く)。

【陸奥松嶋】をしなべて木のめも春のあさみどり松にぞ千代の色はこも  
れる

(出典等・新古今・賀・藤原良経・七三五、⑤色もこもれる)

【陸奥宮城野】あづま路の夜半のながめをかたらなんみやこの山にかゝ

る月かけ

〔新古今〕・羈旅・慈円・九四二

【亀井戸筑紫の天神】ひとりのみながめてちりぬ梅のはなしるばかりなる人はとひこで

〔新古今〕・春上・八条院高倉・五四 (⑤人は問ひこず)

【武藏國角田川】梅香にむかしをとへば春の月こたへぬかげぞ袖にうつれる 〔新古今〕・春上・藤原家隆・四五

【相州江之嶋】岩井くむあたりのおさゝ玉こえてかずくむすぶ秋の夕露 〔新古今〕・夏・藤原兼実・二八〇、④かつがつむすぶ

【六江橋躰】さして行山のはもみなかきくもり心の空にさししつりぶね 〔新古今〕・恋四・詠人不知・一二六三、⑤きえし月かけ

【駒掛堂】身をしれば人のとがとおもはぬにうらみかほにもぬるゝ袖かな 〔新古今〕・恋三・西行・一二三一 (②人のとがとは)

【都清水寺堂】山寺の春の夕ぐれきてみれば入相の鐘に花ぞちりける 〔新古今〕・春下・能因・一一六、①山ざとの

【都西廣澤池】山のはに雲のよこぎる宵のまは出ても月ぞなをまたれける 〔新古今〕・秋上・道因・四一四

【布引瀧】山風はふけどふかねど白波のよるか岩ねは久しかりけり 〔新古今〕・賀・伊勢・七二一、④よするいはねは

【手喰之門】あさみどり糸よりかけてしら露を玉にもぬける春の柳か 〔新古今〕・春上・遍昭・二七

〔新古今〕・春上・遍昭・二七 (以上、中巻) (古今・春上・遍昭・二七) (以上、下巻)

前節で検討した【手喰之門】の「あさみどり」歌を除いて、十一

首中十首が『新古今集』歌である(6)。編者の『新古今集』へのこだわりが見て取れよう。

和歌の好例が期待できない名所(「亀井戸筑紫の天神」「相州江之嶋」など)であれば、非名所歌を使うという方法もある。ただし、その場合でも、発句を用いるとか、韻文は使わないといった編集の仕方もあったはずだ。一方、伝統的な歌枕(「陸奥松嶋」「陸奥宮城野」など)であれば、和歌の候補作を探すのは易しいはずなのに、ここでは敢えて、非名所歌を採用していることになる。ここには、何らかの必然性があつたものと考えられる。それぞれ二例ずつ具体的に検討してみよう。

【和歌の好例が期待できない名所】

【亀井戸筑紫の天神】(亀井戸天神)は、寛文三(一六六三)年、太宰府天満宮の神職大鳥居信祐により、同天満宮が分祀されて創立したものである。頭書では、

……平地なれども、まへにほりをかまへ、そのきしに宮社くわいらうを五色の多のぐにているどり、金銀をちりばめ、むね門をならべ、其前に池を掘、そりばしをかけ、鳥井をたてゝ神前をたつとむ。ちかき比より、神すゞしめのためにとて、毎月縁日に連哥の會あり。あたりなるたんじやくをみれば、

ひとりのみながめてちりぬ梅のはなしるばかりなる人はとひこでと、きらびやかな境内の様子を記述される。「ひとりのみ」歌は、元々は、梅花の美を一人眺める心を歌った歌だが、頭書の文脈では、「天神・道真・梅」への連想が働いて、境内にあつた梅木の存在を示し(7)、床しい境内の雰囲気を印象づけるような効果が期待さ

れる。

【駒掛堂】は、現在の、東京都台東区雷門二丁目、駒形橋の西側にあった堂のことである。頭書では、その名の由来などを説いた後で、

あさくさくわんをんへさんけいのかへりさ、あしをやすめんために、この所よりふねにのりて、江戸橋そのほか方々へ舟付。風はげしければ、舟中へ浪するを見て、心ある人のよめる、

身をしれば人のとがともおもはぬにうらみがほにもぬるゝ袖かなと、浅草観音参詣の帰りに、船に乗る人々の様子が描写される。「身をしれば」歌は、元は、身の程を知る人の微妙な恋の心を歌った歌だが、頭書の文脈では、「風はげしければ、舟中へ浪するを見て」を受けて、船上で波に濡れるのを厭う参詣者の気持ちを汲んだ歌のようにも思われる。

### 【伝統的な歌枕】

【陸奥松嶋】の作例は、勅撰集では、「まつしまやをじまのいそにあさりせしあまのそでこそかくはぬれしか」(後拾遺・恋四・源重之・八二七)以降、その作例も少なくない。頭書では、

奥州に松嶋といへる名所あり。海上に嶋あり。嶋ごとに枝ふりう成きし松あり。嶋々をふねにて見物す。こと心ある人は、この所へはるかくくだりて一見する。雲居和尚、此所にくだり給ひて、さとりすまして居給ふ禅寺あり。海邊に庵をむすびて、蒼々たる嶋を遊にとりて、春はかすみ、秋は霧間につりをたるゝけしき、もろこしの金山寺にもまさりぬべし。此所に金の砂山あり。是をとりて家にかへりみれば、つねのすな也。此所のちんじゆふうじ給ふといひつたへしと也。

をしなべて木のもめ春のあさみどり松にぞ千代の色はこもれる

と、松の優雅な姿を船にて遊覧し、遙々下向して見物する心ある人のことを最初に触れ、最後に、この春の賀歌が引用される。「をしなべて」と景を大きく捉えた歌い出しや、祝言性のある下句から、一首は、あたかも、「心ある人」が、松島の情景を優雅に言祝いだ歌のようでもある。

【武藏國角田川】では、謡曲「隅田川」で著名な、所謂、梅若伝説に基づく故事が語られる。

むさしと下をさのさかいにながれあり。角田川と名づく。むかしみやこよしだのながしどのゝ子息梅わか丸、あき人にかどわされて、此所へくだり、此川ぎしにてひれふし死し給ふ。里のものとりあげ、土くつにうづみ、つかをつき、しるしに柳をうへて、毎年三月十五日にめい日なりとて、大念佛はじまりて、に今追善をなすにより、三月十五日には、きせんあゆみをはこぶ。いにしへの柳朽て根よりおへ出る若木あり。その塚のほとりに寺あり。木母寺と号す。ものうひたるといなり。ある人追善にとて哥よみぬ。

梅香にむかしをとへば春の月こたへぬかげぞ袖にうつれる

「梅香に」歌は、本来は、梅の香りに懐旧の心を催されるという歌であるが、頭書の、梅若丸の追善にこの歌を詠んだという文脈では、梅は、病死した「梅わか丸」を暗示し、非業の死を遂げた少年を悼み、慰める歌となる。

以上、四例を検討したのみであるが、これらは、いずれも、頭書の文脈では、解説と和歌との間にしかるべき脈絡があり、非名所歌

であっても違和感のないような歌が引かれ、結果、名所を印象づける一役が担わされていると考えられるのである。

#### 四 改変

本節では、出典等の本文に、比較的大きな異同があるものを検討したい。具体的には、次のようなものがある。

【安房野嶋崎】あづまぢののじまがさきのしほ風にわがひもゆひしいも  
がかのみ

あづまぢののじまがさきのしほ風にわがひもゆひしいも  
しいもがかのみおもかげにみゆ

(出典等…千載・雑下・旋頭歌・藤原頭輔・一一六六)

【常陸國櫻河】見事さのほかにあらじさくら川さきてはちりぬ花のう

き浪

はかなさを外にもいはじ桜花さきては散りぬあはれ

世中(新古今・春下・藤原実定・一四一)

【鳴立澤】いづれをか花とはわかむ春の日にしぎたつさわのまだ消ぬゆ

き

いづれをか花ともわかむ故郷のかすがの原にまだ消え

ぬ雪(新古今・春上・凡河内躬恒・二二)

【相州金沢】春きては花ともみよと金沢の松のうはばにあわ雪ぞふる

春きては花とも見よとかたをかの松のうは葉にあは雪

ぞふる(新古今・春上・藤原仲実・一九)

【六江橋躰】(既出省略)

(以上、上巻)

【都清水寺堂】(既出省略)

【山城國愛宕】おとにのみありと聞つゝきよ瀧のわたらば袖にかけもみ  
えなむ

ありとのみおとにききつゝおとはがはわたらば袖に  
かけもみえなむ

(新古今・恋一・読人不知・一〇五五)

おとにのみありとききこしみよしのの滝はけふこそ  
袖におちけれ(新古今・恋一・読人不知・九九一)

【京八幡】八幡山さか行神のめぐみにて千世ともさゝじみねの松が枝  
春日山さか行く神のめぐみもて千世ともささじ峰の  
松が枝(新後拾・神祇・藤原良経・一五〇九)

(以上、中巻)

【大和吉野】散まよふ花のよそめはよしの山あらしにさわぐみねの松風  
ちりまがふ花のよそめはよしの山嵐にさわぐ峰の白雲

(新古今・春下・藤原頼輔・一三二)

(以上、下巻)

やはり、『新古今集』を出典等とする事例が目立つ。

この手の作品で、所引和歌などの出典等を確認した際に、『新編国歌大観』の本文と較べて異同があることは、それほど珍しいことでもない。単なる誤刻や異伝の可能性もある。ただし、ここに掲げたものには、意図的な改変が想定される事例が多いようだ。改変には、削除、当該名所の名所歌として仕立て直すといった方法が採られている。

#### 【削除】

たとえば、【安房野嶋崎】名所・野嶋崎は、勅撰集では、旋頭歌である頭輔歌一首のみの珍しい歌枕である（『類字名所和歌集』）。

『和国名所鑑』では、その第六句を削り、普通の短歌のように仕立て直す。旋頭歌という、古風で特殊な形式の短歌よりも、より一般的な形式に改めたのではないか。

当該名所の名所歌として仕立て直す場合、「別名所の名所歌」「非名所歌」を利用するケースがある。

### 【別名所の名所歌↓当該名所歌】

【鳴立澤】【山城國愛宕】【京八幡】の事例が該当する。

【鳴立澤】と言えば、何と言つても、

こころなき身にもあはれはしられけりしぎたつ沢の秋の夕暮

（新古今・秋上・西行・三六二）

が想起されよう。ところが、『和国名所鑑』では、同じ『新古今集』にある別の名所の歌を改変して、鳴立沢の名所歌として仕立て直す。原歌は、白梅と白雪とが見分けにくいという趣向だが、「鳴立つ沢」の名所歌としては無理がある。頭書を、「いと心ありげなる道心」が即興でこんな歌を詠んでしまったと解釈するのは穿ち過ぎだろうか。

【山城國愛宕】では、二首の新古今歌を取り合わせたような名所歌を捻出する。歌枕「清滝（川）」であれば、

きよたきのせぜのしらいとくりためて山わけ衣おりてきましましを

（古今・雑上・神たい法し・九二五）

くものなみかからぬさよの月かげをきよたきはにうつしてぞ見る

（金葉・秋・前斎宮六条・一八七）

石ばしるみづのしら玉かずみえてきよたき川にすめる月影

（千載・秋上・藤原俊成・二八四）

いかだおろすきよたき川にすむ月はさをにさはらぬ氷なりけり

（同・雑上・俊恵・九九一）

ふりつみしたかねのみゆきとけにけりきよ滝川の水の白なみ

（新古今・春上・西行・二七）

いはねこすきよ滝河のはやければ波をりかくるきしの山吹

（同・春下・源国信・一六〇）

水上やたえだえこほる岩間よりきよたき河に残るしら浪

（同・冬・藤原良経・六三四）

と、八代集だけでも七首の作例があり、とりわけ『新古今集』には、西行の著名歌を含めて三首もある。これらの先行歌を無視して、『新古今集』の、別の名所歌二首の表現を組み合わせて新歌を捻出したことになる。清滝川の急流や清らかさに着目した和歌が多い中で、やや異質な名所歌となっているが、これは愛宕山中を流れる清滝川の深遠さを示そうとしたのだろう。

【京八幡】では、『新後拾遺集』の良経歌の初句「春日山」を「八幡山」に改変する。勅撰集では、

やはた山さかゆくみねはこえはてて君をぞいのる身のうれしさに

（玉葉・神祇・源通光・二七六五）

八幡山神やきりけん鳩の杖老いてさか行く道のためとて

（新後拾遺・神祇・源家長・一五〇八）

八幡山跡たれそめししめの内になほよろづ世と松風ぞ吹く

（新統古今・神祇・後鳥羽院・二〇九二）

のような八幡山の名所歌もあり、新歌も名所歌として違和感はない(8)。

### 「非名所歌→当該名所歌」

【相州金沢】【常陸國櫻河】の事例が該当する。

【相州金沢】の頭書は、鎌倉の説明から始まり、金沢に赴くという構成である。

……海上を見わたせ、嶋々の松ばやし、絵にかくとも筆に及がたし。

凡我てうにかほどの見物あらじとて、こゝにて日をぞくらしける。

春きては花ともみよと金沢の松のうはばにあわ雪ぞふる

「春きては」歌は、『新古今集』の仲実歌の第三句「かたをかの」を「金沢の」に改めただけである。頭書の文脈では、雪の描写はないが、「嶋々の松ばやし、絵にかくとも筆に及がたし」の記述を受けて、金沢の早春の景を詠んだ歌となる。

### 【常陸國櫻河】では、

常陸國つくば山のふもとの下だりをさくら川といへり。川のほとりにさくら姫の宮あり。御神木も桜の大木也。此さくら姫、こんじきのひかりをはなち給ひて、富士山に飛行し給ひて、我此山のぬしなりとつげ給ふとなり。此川をさくら川といひし事は、山中にさくらあり。弥生中じゆんの比、花ちりしく山谷の雪とけてめぐみ出る水、この川へながるゆへに、春は川浪にさくらの花うく也。これによつてさくら川となづく。かゝるあづまのはて迄も大宮人下り給ひて哥をよみ給ふ也。我にも口ずさみにとて、

見事さのほかにあらじさくら川さきてはちりぬ花のうき浪

と、桜姫の宮の故事、櫻河の名の由来を述べた後で、語り手「我

が、「見事さの」歌を口ずさむという展開である。櫻河については、「常よりも春べになればさくら河花の浪こそまなくよすらめ」(後撰・春下・紀貫之・一〇七)という、勅撰集唯一の例があり、これは、解説文の「春は川浪にさくらの花うく也」の記述とも対応する。ところが、『和国名所鑑』では、この貫之歌を最後に引くのではなく、敢えて、『新古今集』の実定歌を大きく改変して名所歌を創作し、落花に世の無常を感じる歌を換骨奪胎して、花の散り敷く壯観な光景を詠じてみせた。ただし、「見事さの」という歌い出しは、くだけすぎていて、和歌的な表現とは言えない。

### 【その他の例】

和歌の好例は期待できない【六江橋鉢】の場合、頭書では、

左は、海上まなくとして、渡海のふね、順風にほをまく。雨風つよければ、浪にたゞよひてはしる也。

さして行山のはもみなかきくもり心の空にさししつりぶね

と最後に引用されている。第五句が「きえし月かげ」(新古今)の形よりも、「さししつりぶね」(和国名所鑑)の方が、釣り船、渡海の船という違いはあるものの、船という点での繋がりは生まれる。ただし、「さして」「さしし」の重複や、下句「心の空にさししつりぶね」の解釈の難しさなどの問題は残る。

【都清水寺堂】の能因歌も、初句「山ざとの」(新古今)よりは、「山寺の」(和国名所鑑)の方が、名所・清水寺の歌としてはよりふさわしく、細かな異同だが、意図的な改変の可能性を考えておきたい(9)。

## おわりに

本稿では、『和国名所鑑』特徴の一つとして、所引和歌に着目し、その特徴や利用の実態を具体的に検討した。

大きな特徴としては、典拠等として新古今歌が多用されている点が挙げられる。そして、その場合、『新古今集』に当該名所の名所歌があったとしても、それを利用することはなく、敢えて非名所歌を活用するという傾向がある。名所歌としてみた場合、一見そぐわないような方法であるが、頭書の文脈のなかでは、しかるべき必然性が考慮されていた。また、新古今歌を出典等とする和歌には、原歌に対して比較的大きな改変を加えて、当該名所歌として仕立て直した事例も目立つ。

『和国名所鑑』で引用される和歌には、当該の名所歌を引用するといった自然な、ある意味、単純な方法も採られているのだが、一方で、新古今歌を使った、手の込んだ方法も見出させる。『和国名所鑑』は、名所歌集の柔軟な編集の一端を垣間見せる、ユニークな作品なのである。

【表1】『和国名所鑑』引用和歌の出典

	名所	和歌の出典等	部立	作者	名所歌	大きな改変
上巻	松嶋	新古今735	賀	藤原良経	×	×
	野嶋崎	千載1166	雑	藤原頭輔	○	○
	宮城野	新古今942	羈旅	慈円	×	×
	櫻河	新古今141	春下	藤原実定	×	○
	亀井戸筑紫の天社	新古今54	春上	八条院高倉	×	×
	角田川	新古今45	春上	藤原家隆	×	×
	嶋立澤	新古今22	春上	凡河内躬恒	○(別)	○
	江之嶋	新古今280	夏	藤原兼実	×	×
	金沢	新古今19	春上	藤原仲実	×	○
	六江橋	新古今1263	恋四	読人不知	×	○
駒掛堂	新古今1231	恋三	西行	×	×	
中巻	宮嶋	未詳、狂歌か			×	
	清水寺	新古今116	春下	能因	×	○
	嵯峨	未詳、狂歌か				
	廣澤池	新古今414	秋上	道因	×	×
	愛宕	新古今1055,99	恋一	読人不知	○(別)	○
	吉田	拾遺615	神楽	平兼盛	○	×
	八幡	新後拾1509	神祇	藤原良経	○(別)	○
		古今227	秋上	布留今道	○	×
	鳥羽戀塚	後撰1231	雑三	在原業平	○	×
布引の滝	新古今721	賀	伊勢	×	×	
下巻	住吉岸松	詞花170	賀	読人不知	○	×
	三輪大明神	古今780	恋五	伊勢	○	×
	吉野	拾遺243	冬	源景明	○	×
		新古今132	春下	藤原頭輔	○	○
		山家集69	春	西行	○	×
	(興福寺)	詞花	春	伊勢大輔	○	×
	南都大佛	狂歌				
	猿澤之池	拾遺1289	哀傷	柿本人丸	○	×
	手喰之門	古今27	春上	遍昭	?	×
		古今18	春上	読人不知	○(別)	×
春日町	永久百首48	春日祭	常陸		×	
般若寺	狂歌					

〔注〕

(1) 各図の見出しや師宣の挿絵を一瞥するだけでも、宗教的な名所・建造物の多さは明かだ。序文にも「諸国の名所旧跡宮社仏閣をとりあつめ絵にし」とある。頭書の記述で触れられている場合も含めて、以下のように数えた。

松島：瑞巖寺、桜河：「さくら姫の宮」、亀井戸筑紫の天神：亀井戸天神、角田川：梅若丸の塚、木母寺、江之島：江之島弁財天（江島神社）、金沢：鶴岡八幡宮、駒掛堂：駒掛堂、浅草観音（浅草寺）、観世音寺：浅草寺、浅草神社、忍岡：寛永寺（上巻、9 箇所）

宮島：弁財天、厳島神社、祇園牛頭天王：京都祇園社（八坂神社）、清水寺、嵯峨：釈迦堂（清涼寺）、愛宕：愛宕神社、吉田：吉田神社、新黒谷：（青龍寺、金戒光明寺）、卅三間堂：蓮華王院、八幡：石清水八幡宮、鳥羽戀塚（中巻、10 箇所）

住吉岸松：住吉大社、天王寺：四天王寺、長谷寺：初瀬寺、三輪大明神：大神神社、吉野：蔵王権現、興福寺：興福寺、南都大佛：東大寺、手喰之門：東大寺、二月堂：東大寺、春日町：春日大社、南円堂：興福寺、盤若寺（下巻、12 箇所）

(2) 松平進、日本書誌学大系 57 『師宣祐信絵本書誌』（青裳堂書店 昭 63）に、パリ国立図書館版画部所蔵として紹介される。

(3) 催馬楽・浅緑「浅緑 濃い縹 染めかけたりとや見るまでに 玉光る 下光る 新京朱雀の垂り柳 またはた むとなる 前栽秋萩 瞿麦唐葵 垂り柳（岩波文庫）、「あをによしならの都の玉柳色にもしるく春はきにけり」（拾遺愚草一三〇九）

(4) 上巻巻頭「松嶋」や中巻巻末の「布引の滝」も賀歌が引かれているので、巻末または巻頭に祝言性のある名所歌を引用するという方針があつたことが窺える。

(5) 古今集古注の『古今和歌集灌頂口伝』（南北朝期成立）や俳諧伝記『滑稽太平記』（延宝七年（一六七九）以後成立）では、『和国名所鑑』と同じ歌句で引かれている。

(6) 「あさみどり」歌は、京の西寺の脇の柳を詠んだ歌であるので、名所歌と言ってもよいかもしれないが、『類字名所和歌集』『歌枕名寄』などには採録されていないことから、非名所歌として扱うことにした。

(7) 頭書では、他に、梅の花の記述はないが、挿絵では、社殿の後方にあるのは梅花であろうか。『江戸名花暦』では、梅の名所の一つとして亀戸天満宮境内が挙げられる。「境内梅樹多きなかに、飛梅の稚木あり。筑紫よりここにうつす」（『日本名所風俗図会 3』角川書店 昭 54）

(8) 『類字名所和歌集』では、八幡山の項に、この良経歌が「八幡山さか行神のめくみもてちよともさゝし峯松か枝」の形で載る。『新後拾遺集』では、直前に、家長の八幡山詠が配列されているので混同されたのかもしれない。良経歌は、春日山の項にも、正しい形で掲載されている。

(9) なお、能因歌については、初句「山寺の」とする異伝もあったようだ(『定家十定』、「能因法師歌集」(新編増補私家集大成所収「能因II」)。

## 天和二年刊『和国名所鑑』影印・翻刻・略注

一、天和二(一六八二)年刊『和国名所鑑』(フランス国立図書館蔵)影印、翻刻紹介し略注を施したものである。画像は、Gallicaで公開されているものを用いた。

一、翻刻に際しては、底本に忠実であることを心がけたが、製版・印刷の都合上と通読の便宜とを考慮して、次のような方針に従った。

- 1 原本の変体仮名はすべて現行の字体に改めた。
- 2 漢字については、できるだけ原本の字体を尊重して、印字可能な範囲で底本の字体の再現を試みた。
- 3 読み易さを考慮して、濁点と句読点を施した。原本の振り仮名は翻刻しなかった。
- 4 フドリ字は、「々」(漢字)、「々」(平仮名)に統一したが、「く」はそのままとした。
- 5 判読できない箇所は、■で示した。大方のご教示をお願いしたい。

● 奥州の松嶋  
 海上に嶋あり。嶋ごとに枝ふりう成  
 きし松あり。嶋々をふねにて見物す。こと心ある人は、この所へはる  
 かくくだりて一見する。雲居和尚、此所にくだり給ひて、さとりすま  
 して居給ふ禅寺あり。海邊に庵をむすびて、蒼々たる嶋を遊にとりて、  
 春はかすみ、秋は霧間につりをたるまけしき、もろこしの金山寺にも  
 まさりぬべし。此所に金の砂山あり。是をとりて家にかへりみれば、  
 つねのすな也。此所のちんじゆふうじ給ふといひつたへしと也。  
 をしなべて木のめも春のあさみどり松にぞ千代の色はこもれる



陸奥松嶋

(上1ウ)

● 松嶋の歌枕  
 余の島々から成る景勝地。 ○ふりう…風流。優雅な。 ○雲居和尚  
 …江戸時代前期の禅僧（臨濟宗）。天正一〇（一五八二）年、万治二  
 （一六五九）年、土佐の人。京都妙心寺で修行し、諸国行脚の後、仙  
 台藩主伊達忠宗に招かれ、松島瑞巖寺住持となり、同寺を中興する。  
 ○金山寺…径山寺。中国、浙江省杭州、天目山の東北峰にある寺。  
 中国五山の一つ。七六九年唐の代宗の勅命により建立。臨濟宗の大道  
 場。 ○ちんじゆ…鎮守。一定の地域で、地霊を鎮め、その地を守護  
 する神。また、その神社。 ○をしなべて…新古今・賀・藤原良経  
 ・七三五（⑤色もこもれる）



(上2オ)

陸奥松嶋

● 奥州に松嶋といへる名所あり。海上に嶋あり。嶋ごとに枝ふりう成  
 きし松あり。嶋々をふねにて見物す。こと心ある人は、この所へはる  
 かくくだりて一見する。雲居和尚、此所にくだり給ひて、さとりすま  
 して居給ふ禅寺あり。海邊に庵をむすびて、蒼々たる嶋を遊にとりて、  
 春はかすみ、秋は霧間につりをたるまけしき、もろこしの金山寺にも  
 まさりぬべし。此所に金の砂山あり。是をとりて家にかへりみれば、  
 つねのすな也。此所のちんじゆふうじ給ふといひつたへしと也。  
 をしなべて木のめも春のあさみどり松にぞ千代の色はこもれる

○ 松嶋：陸奥国の歌枕。現、宮城県中部、松島湾の湾岸と湾内二六〇  
 余の島々から成る景勝地。 ○ふりう…風流。優雅な。 ○雲居和尚  
 …江戸時代前期の禅僧（臨濟宗）。天正一〇（一五八二）年、万治二  
 （一六五九）年、土佐の人。京都妙心寺で修行し、諸国行脚の後、仙  
 台藩主伊達忠宗に招かれ、松島瑞巖寺住持となり、同寺を中興する。  
 ○金山寺…径山寺。中国、浙江省杭州、天目山の東北峰にある寺。  
 中国五山の一つ。七六九年唐の代宗の勅命により建立。臨濟宗の大道  
 場。 ○ちんじゆ…鎮守。一定の地域で、地霊を鎮め、その地を守護  
 する神。また、その神社。 ○をしなべて…新古今・賀・藤原良経  
 ・七三五（⑤色もこもれる）



(上3才)



(上2ウ)

安房野嶋崎

●安房の国のじまがさきといひしは、しげりたる山のふもとの海辺、山路の二けい、余にあらんほどの所也。むかしよりのじまむらとて、さとあり。山路なればかうさくすくなふして、あま、れうしのみ住し所なり。山がつは、山中にわけ入てたきぎを切、此所へおろしてはげみとする。此うらにてあみをおろし、うをゝとる。あらいそなれば、つりぶね、なみにたゞよふ。すさきによするなみ、しらいとをみだしたるけしき、おもしろしとて、心ある人は、此所へたづねきて一見し給ふほどのおもしろきうらなり。山川多し。むかし哥人東へくだり給ひしとき、此所を聞およびて立より給ひつゝ、しづのおのいやしきわざを見て、のじまといふを句にむすびて哥よみけり。千載集離之部

あづまぢののじまがさきのしほ風に

わがひもゆひしいもがかほのみ

○野嶋崎：名所「野島が崎」としては、淡路国、現、兵庫県の淡路島にある野島の岬を言うが、ここでは、房総半島の最南端に位置する、現、千葉県安房郡白浜町白浜のことである。万葉二三五〇番歌「粟路之野嶋之前乃」を「安房路の」と誤訓したことに拠る(吉原栄徳『和歌の歌枕・地名大辞典』おうふう・平20) ○かうさく…耕作。 ○あま、れうし…海人、漁師。 ○山がつ…猟師・きこりなど山中に生活する、身分が低い人々。 ○すさき…州崎。州が長く河海に突出して、岬のようになった所。 ○しづのお…賤の男。 ○あづまぢの…千載・雑下・藤原頭輔・一一六六(③はまかぜに⑥おもかけにみゆ)



常陸國つくば山のふもと下だりをさくら川といへり。川のほとりにさくら姫の宮あり。御神木も桜の大木也。此さくら姫、こんじきのひかりをはなち給ひて、富士山に飛行し給ひて、我此山のぬしなりとつげ給ふとなり。此川をさくら川といひし事は、山中にさくらあり。弥生中じゆんの比、花ちりしく山谷の雪とけてめぐみ出る水、この川へながるゆへに、春は川浪にさくらの花うく也。これによつてさくら川となづく。かゝるあづまのはて迄も大宮人下り給ひて哥をよみ給ふ也。我にも口ずさみにとて、

常陸國つくば山のふもと下だりをさくら川といへり。川のほとりにさくら姫の宮あり。御神木も桜の大木也。此さくら姫、こんじきのひかりをはなち給ひて、富士山に飛行し給ひて、我此山のぬしなりとつげ給ふとなり。此川をさくら川といひし事は、山中にさくらあり。弥生中じゆんの比、花ちりしく山谷の雪とけてめぐみ出る水、この川へながるゆへに、春は川浪にさくらの花うく也。これによつてさくら川となづく。かゝるあづまのはて迄も大宮人下り給ひて哥をよみ給ふ也。我にも口ずさみにとて、



(上5才)



(上4ウ)

常陸國櫻河

●常陸國つくば山のふもと下だりをさくら川といへり。川のほとりにさくら姫の宮あり。御神木も桜の大木也。此さくら姫、こんじきのひかりをはなち給ひて、富士山に飛行し給ひて、我此山のぬしなりとつげ給ふとなり。此川をさくら川といひし事は、山中にさくらあり。弥生中じゆんの比、花ちりしく山谷の雪とけてめぐみ出る水、この川へながるゆへに、春は川浪にさくらの花うく也。これによつてさくら川となづく。かゝるあづまのはて迄も大宮人下り給ひて哥をよみ給ふ也。我にも口ずさみにとて、

見事さのほかにはあらしさくら川さきてはちりぬ花のうき浪

○櫻河：常陸国の歌枕。茨城県桜川市岩瀬町北部の鏡ヶ池を水源とし、筑波山の裾を西から南に回り、土浦市で霞ヶ浦に注ぐ川。一名、筑波川。○下だり：川の流れ。○さくら姫の宮：桜姫とは、木花開耶姫（コノハナノサクヤビメ）のこと。岩瀬町磯部には、磯部稲村神社があり、謡曲「桜川」で知られる桜の名所であった。「さん候わが古里のおん神をば 木華開耶姫と申して 御神体は桜木にておん入り候 されば別れしわが子もおん氏子なれば 桜子と名づけ育てしかば 神のおん名も開耶姫 尋ぬる子の名も桜子にて またこの川も桜川の 名も懐かしき花のちりを あだにもせじと思ふなり」(謡曲「桜川」)

○此さくら姫：木花開耶姫は、富士の神として浅間神社にまつられている。○春は川浪にさくらの花うく也：「常よりも春べになれば さくら河花の浪こそまなくよすらめ」(後撰・春下・紀貫之・一〇七)

○口ずさみ：詩歌などを思い浮かぶままに朗詠すること。また、そ

の詩歌。 ○見事さのゝ…参考「はかなさを外にもいはじ桜花さきて  
は散りぬあはれ世中」(新古今・春下・藤原実定・一四二)





〇しぎたつ沢といふ名所あり。あしの生出たる沼也。むかしは、公家  
 門跡がたの此所に御行あつて、三十一字にことよせてながめ給ひし古  
 跡なり。海道のはたなれば、行來の旅人、この所にてたづねけれども、  
 所のものあんないをしらず、たれむかしをかたるものなし。べうかく  
 したる所なれば、いと心ほそく、ふるさとの事などおもひ出せり。か  
 る所に、いと心ありげなる道心、此所に立やすらひて、いぎしゆ  
 つらねてとをらんとて、



(上7ウ)

〇いづれをか花とわかむ春の日にしぎたつさわのまだ消ぬゆき  
 〇道心…仏道修行をする人。 〇一し  
 今・秋上・三六二に拠る。



(上8オ)

〇鴨立澤…相模国。現、神奈川県中郡大磯町の西端にある地。西行の  
 「二ころなき身にもあはれはしられけりしぎたつ沢の秋の夕暮」(新古  
 今・秋上・三六二)に拠る。 〇道心…仏道修行をする人。 〇一し  
 ゆつらねて…一首を詠んで。 〇いづれをか…参考「いづれをか花  
 とむわかむ故郷のかすがの原にまだ消えぬ雪」(新古今・春上・凡河  
 内躬恒・二二)

●あつゝあつゝの  
 初めとてあつゝの天  
 のしつゝあつゝの文  
 字のつゝあつゝのふ  
 しのつゝあつゝの  
 多のつゝあつゝの  
 うほつゝあつゝの  
 のつゝあつゝの  
 ちつゝあつゝの  
 ちつゝあつゝの  
 ちつゝあつゝの  
 ちつゝあつゝの  
 ちつゝあつゝの  
 ちつゝあつゝの

相州江之嶋



(上8ウ)

●あつゝあつゝの  
 初めとてあつゝの天  
 のしつゝあつゝの文  
 字のつゝあつゝのふ  
 しのつゝあつゝの  
 多のつゝあつゝの  
 うほつゝあつゝの  
 のつゝあつゝの  
 ちつゝあつゝの  
 ちつゝあつゝの  
 ちつゝあつゝの  
 ちつゝあつゝの  
 ちつゝあつゝの  
 ちつゝあつゝの



(上9オ)

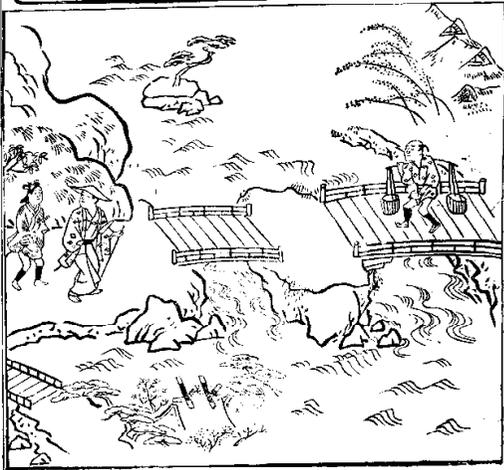
相州江之嶋

●多のしまのべんざいてんと申たてまつるは、我てう三べんざいてんのうち也。あきの宮嶋のべんざいてん、あふみのちくぶじま、相州系のしまとて、是三つのれいぶつなり。海のほとりに夜の内ニ、しゅつげんしたる山なり。下のみや、上の宮、岩あなのべんざいてんとて、三所に立給ふ也。岩もとのべんざいてん、海上まなくたるいわのきしにあり。それよりしていわあなへ入る。さんけいのだうしや、たいまつをとぼしてせんだつをたのみ、穴へ入也。此岩もとのなみうちぎわにて、あま共あわびをとる。獵師あみをおろして、れうをする、おもしろき所也。

岩井くむあたりのおざゝ玉こえてかずくむすぶ秋の夕露

- 江之嶋：相模国。現、神奈川県、相模湾北東部の島。江島神社（江島弁天）がある。 ○べんざいてん：弁財天。 ○あふみのちくぶじま：近江の竹生嶋。 ○れいぶつ：霊仏。 ○下のみや、上の宮：一つの神社が、二つまたは三つの宮からなり、それぞれが神殿や拝殿を備えている場合、その建物の位置がもつとも上方にある宮を「かみのみや」と言い、もつとも家宝にある宮を「しものみや」と言う。 ○まんくたる：漫々たる。遠くひろびろとしたさま。 ○さんけいのだうしや：参詣の道者。道者は、杜寺・礼状へ参詣・巡拝する旅人。
- たいまつをとぼして：松明を灯して。 ○せんだつ：先達。案内者。 ○獵師：漁師。 ○岩井くむ：新古今・夏・藤原兼実・二八

●相州の御所  
 のよりともひし所は、みなもとのよりともこの、此所に御所をたて、世をおさめ給ふ也。ゆいがはまをとをり、つるが岡の八まん宮にさんけいしてみれば、聞しにまさり金銀をちりばめたるこんりうなり。かたじけなくも源氏の氏神也。それよりやつくをけんぶつして、よりとも公の御所のあと、北条やしき、びくに御所を見物して、金沢にさしけり。海上を見わたせ、鳴々の松ばやし、絵にかくとも筆に及がたし。凡我てうにかほどの見物あらじとて、こゝにて日をぞくらしける。



(上9ウ)

ひくひかるとらわ  
 してんをばさう  
 くり海とをさ  
 せつくとたたら  
 ばよわささる  
 びくし九神  
 びくのののの  
 よしとくはく  
 せうし  
 春きてはは  
 松うつる  
 あり  
 子



(上10オ)

相州金沢

●相州かまくらといひし所は、みなもとのよりともこの、此所に御所をたて、世をおさめ給ふ也。ゆいがはまをとをり、つるが岡の八まん宮にさんけいしてみれば、聞しにまさり金銀をちりばめたるこんりうなり。かたじけなくも源氏の氏神也。それよりやつくをけんぶつして、よりとも公の御所のあと、北条やしき、びくに御所を見物して、金沢にさしけり。海上を見わたせ、鳴々の松ばやし、絵にかくとも筆に及がたし。凡我てうにかほどの見物あらじとて、こゝにて日をぞくらしける。

春きては花ともみよと金沢の松のうはばにあわ雪ぞふる

○金沢：神奈川県横浜市の地名。鎌倉時代、金沢入江が港として利用された。景勝地といわれた金沢八景がある。 ○かまくら：鎌倉は、東、北、西の三方は山に囲まれ、南は相模湾に面している。地形は谷が多く、これをヤトという。 ○みなもとのよりともこ：源頼朝公。

○ゆいがはま：由比ヶ浜。神奈川県鎌倉市の、相模湾に面する海岸。 稲村ヶ崎から飯島ヶ崎に至る弓状の砂丘海岸。 ○つるがおか八まん宮：鶴岡八幡宮。鎌倉幕府の宗祀として將軍参拝や拝賀式が行われた。 ○こんりう：建立。 ○やつく：谷谷。あちこちの谷。 ○びくに御所：比丘尼御所。 ○さしけり：行った。 ○春きてはは：参考「春きては花とも見よとかたをかの松のうは葉にあは雪ぞふる」 (新古今・春上・藤原仲実・一九)

●ちゆびよくほうかう相つとめ国元へ行人あり。たび立によき日成とて、あまぞらをもいとわず、江戸を立て品川へゆく比は、かみな月ふりみならずみさだめなき時雨をさそふ折なれば、しきりにあめふりきたりて、行ききもみわかず、行人あり。六ごうのはしへかゝる。此川と申は、たば川のながれなり。はしの長サ百九けんあり。はし中より右の方に池上のだう見ゆる。左は、海上まんとくとして、渡海のふね、順風にほをまく。雨風つよければ、浪にたゞよひてはしる也。



(上10ウ)

たば川のたれ  
ちゆびよくほうかう  
相つとめ国元へ  
行人あり。たび立  
によき日成とて、  
あまぞらをもいと  
わず、江戸を立て  
品川へゆく比は、  
かみな月ふりみ  
ならずみさだめな  
き時雨をさそふ  
折なれば、しきり  
にあめふりきたり  
て、行ききもみわ  
かず、行人あり。  
六ごうのはしへか  
ゝる。此川と申は、  
たば川のながれな  
り。はしの長サ百  
九けんあり。はし  
中より右の方に池  
上のだう見ゆる。  
左は、海上まんと  
くとして、渡海の  
ふね、順風にほを  
まく。雨風つよけ  
れば、浪にたゞよ  
ひてはしる也。



(上11オ)

六江橋躰

●しゆびよくほうかう相つとめ国元へ行人あり。たび立によき日成とて、あまぞらをもいとわず、江戸を立て品川へゆく比は、かみな月ふりみならずみさだめなき時雨をさそふ折なれば、しきりにあめふりきたりて、行ききもみわかず、行人あり。六ごうのはしへかゝる。此川と申は、たば川のながれなり。はしの長サ百九けんあり。はし中より右の方に池上のだう見ゆる。左は、海上まんとくとして、渡海のふね、順風にほをまく。雨風つよければ、浪にたゞよひてはしる也。

さして行山のはもみなかきくもり心の空にさししつりぶね

○六江橋：六郷橋。武蔵国。六郷は、現、東京都大田区南部の地名で、多摩川下流の左岸にある。「東海道の渡し場。戦国時代には架橋されていたが、しばしば流失したり戦災で焼け落ちたりした。江戸時代にも当初は架橋されていたが、1688年(元禄元)7月21日の洪水で流失し、その後は渡船にかわった」(『日本歴史大事典』小学館、「六郷の渡」)

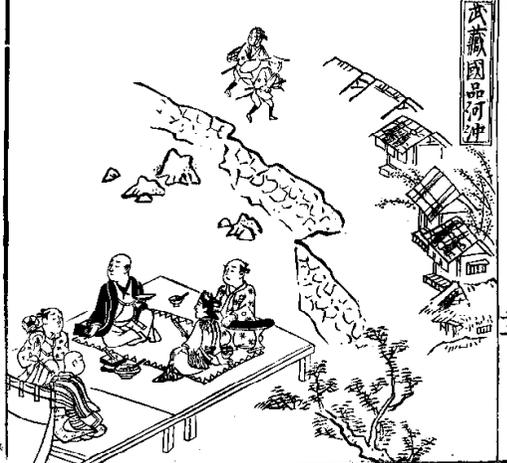
○しゆびよく：首尾良く。都合良く。 ○ほうかう：奉公。 ○かみな月ふりみならずみさだめなき時雨をさそふ：「神な月ふりみならずみ定なき時雨ぞ冬の始なりける」(後撰・冬・読人不知・四四五)

○たば川：多摩川。「西多摩郡雲取山の奥、雁坂峠の東南に発し、市之瀬川と云ひ、(甲州都留郡、及び東山梨郡の管内)柳沢川、黒川等を合し丹波(タバ)川の名あり、……」(『増補大日本地名辞書』また、多波川の表記も見える(同辞書)。 ○池上のだう：「池上」に「いけがみ」と付訓。であれば、大田区中央にある池上を指す。ここは、日蓮上人入寂の地で、池上本門寺がある。 ○さして行く：参考「さして

ゆく山のはもみなかきくもり心のそらにきえし月かげ」(新古今・恋  
四・読人不知・一二六三)

●うわさやひびき  
 目地の花のことばきとて、かなたこなたへざゞめ  
 くおりから、いざや塩干を見物せんとて、友どちより合、さゝなどを  
 もたせて、芝の高縄手へ行、海手をみれば、人あまたあつまり居て、  
 塩の干潟のはまぐりなどとりてあそぶもあり。又かたはらを見れば、  
 すだりにくわいしなどをそへて、はいかいをする人は、予もすきなり  
 とて、立まじはりてほつくをしてなぐさみぬるをきけば、上座にあり  
 し法師のいへるは、  
 ごうなのいゑひがたあそびやけふのるす  
 つうとほすじやがたら嶋や塩のけふ  
 けふぞ塩干いづのみさきにせきもなし  
 けふぞ塩干くむやせけんのいとのみ  
 など、いひくゝてなぐさみし。

●品川  
 現、東京都品川区北東部の地名。東京湾に面する地  
 域で、江戸時代は東海道五十三次の第一の宿駅が置かれた。○桃の  
 花のことばき…桃の節句。○ざゞめく…賑やかにする。○塩干…  
 潮干狩り。旧暦三月三日頃の春の大潮の時が好時期とされる。○さ  
 ゝ…酒。○芝…東京都港区東部の地名。江戸時代は、東京湾に臨む  
 景勝の地。○高縄…東京都港区南部にある地名。東京湾を望む景勝  
 の台地。高縄手で、高縄の方へ、の意。○くわいし…懐紙。○す  
 き…数寄。○はいかい…俳諧。○ほつく…発句。○ごうなのい  
 ゑ…未詳。「ごうな」は、寄居虫、がうな、ヤドカリの古名。○つ  
 うとほす…未詳。じやがたら嶋は、ジャガタラ縞。江戸時代に渡来し



(上12オ)

(上11ウ)

武蔵國品河沖

●ころはやよひ三日、桃の花のことばきとて、かなたこなたへざゞめ  
 くおりから、いざや塩干を見物せんとて、友どちより合、さゝなどを  
 もたせて、芝の高縄手へ行、海手をみれば、人あまたあつまり居て、  
 塩の干潟のはまぐりなどとりてあそぶもあり。又かたはらを見れば、  
 すだりにくわいしなどをそへて、はいかいをする人は、予もすきなり  
 とて、立まじはりてほつくをしてなぐさみぬるをきけば、上座にあり  
 し法師のいへるは、  
 ごうなのいゑひがたあそびやけふのるす  
 つうとほすじやがたら嶋や塩のけふ  
 けふぞ塩干いづのみさきにせきもなし  
 けふぞ塩干くむやせけんのいとのみ  
 など、いひくゝてなぐさみし。

たジャワ島産の縞織物。 ○けふぞ塩干いつのみさきに…未詳。陰曆  
三月の大潮の際、舟で海へ漕ぎ出し、干潮になると舟から降りて潮干  
狩などをし、潮が満ちてくればまた舟に戻って遊ぶこと。春の季語。  
いつのみさきは、伊豆の岬。 ○けふぞ塩干くむやせけんの…未詳。

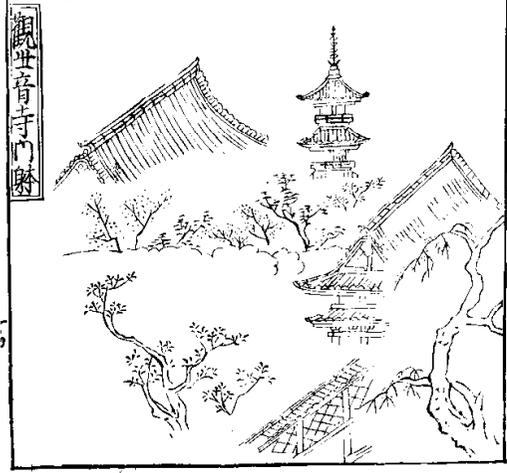


●わんくわんく  
 のどろどろとゆるゆる  
 せしやうんせうんせう  
 せしやうんせうんせう  
 人の心もすなほになりて  
 仏神しんかうしてあゆみをはこ  
 ぶ中に、わけてあさくさくわんぜ音は、れいげんあらたにましませば、  
 二世あんらくをいのり、きせんあゆみをなすに、くんじゆせり。かた  
 じめなくも此御そんぞうは、あさくさ川の流れより草かるおきな引あ  
 げ給へば、こんじきのひかりをはなち給ふ正くはん也。然るを、此所  
 にあがめ給ふと也。其おきな親子三人三社権現とに今あがめ奉るなり。  
 姥が池、此寺内にあり。仁王門の前にごふくのちや屋あり。本堂の前  
 にいとざくらさきければ、  
 針ほどな枝にも花やいとざくら



(上13ウ)

わんくわんくわんく  
 のどろどろとゆるゆる  
 のひりてゆるゆる  
 せしやうんせうんせう  
 せしやうんせうんせう  
 人の心もすなほになりて  
 仏神しんかうしてあゆみをはこ  
 ぶ中に、わけてあさくさくわんぜ音は、れいげんあらたにましませば、  
 二世あんらくをいのり、きせんあゆみをなすに、くんじゆせり。かた  
 じめなくも此御そんぞうは、あさくさ川の流れより草かるおきな引あ  
 げ給へば、こんじきのひかりをはなち給ふ正くはん也。然るを、此所  
 にあがめ給ふと也。其おきな親子三人三社権現とに今あがめ奉るなり。  
 姥が池、此寺内にあり。仁王門の前にごふくのちや屋あり。本堂の前  
 にいとざくらさきければ、  
 針ほどな枝にも花やいとざくら



(上14オ)

観世音寺門跡

●おさまる御代のとをときゆへに、世上くわんくとしておだやかな  
 りければ、人の心もすなほになりて、仏神しんかうしてあゆみをはこ  
 ぶ中に、わけてあさくさくわんぜ音は、れいげんあらたにましませば、  
 二世あんらくをいのり、きせんあゆみをなすに、くんじゆせり。かた  
 じめなくも此御そんぞうは、あさくさ川の流れより草かるおきな引あ  
 げ給へば、こんじきのひかりをはなち給ふ正くはん也。然るを、此所  
 にあがめ給ふと也。其おきな親子三人三社権現とに今あがめ奉るなり。  
 姥が池、此寺内にあり。仁王門の前にごふくのちや屋あり。本堂の前  
 にいとざくらさきければ、  
 針ほどな枝にも花やいとざくら

○観世音寺：浅草寺のこと。 ○くわんく：侃々。閑閑。寛寛。寛  
 緩。緩緩。 ○しんかう：信仰。 ○あさくさくわんぜ音：浅草観世  
 音。 ○れいげんあらたに：靈験があらたか。 ○二世：現世と来  
 世。 ○きせん：貴賤。 ○くんじゆ：群集。 ○そんぞう：尊像。  
 ○正くはん：聖(正) 観世音の略。 ○姥が池：「今馬道六丁目の  
 人家の間にあたり、近年まで僅に小泓を遺せしが、埋めて後は唯伝説  
 のみとなりぬ。本寺縁起並びに回国雜記、江戸名所記、江戸雀等に、  
 此を石枕のひとつ屋の姥の遺跡と説く」(『増補大日本地名辞書』)  
 ○かたじけなくも：「むかし武蔵国宮戸川の辺に、兄弟の漁父有、  
 名付て檜熊の浜成、竹成といふ、すなはち磯辺に出て、浦曲にさすら  
 ひ、世を渡るよすがとなんしけり。人王三十四代推古天皇三十六年戊  
 子年三月十八日癸丑、碧落に雲消て、蒼溟に風靜なる朝、江戸浦にて

釣をたれ、網を引業をなしけるに、覚えず観音の像のみ網にかゝり給ひて、いと更に遊魚の類は釣をも沈めざりけり、爰に蟹のたく縄くり返し、又異浦に浦伝ふといへども、七浦の浦毎にさながら同じさまなる仏像のみかゝり給へり」（『増補大日本地名辞書』「浅草寺」所引「浅草寺縁起」）

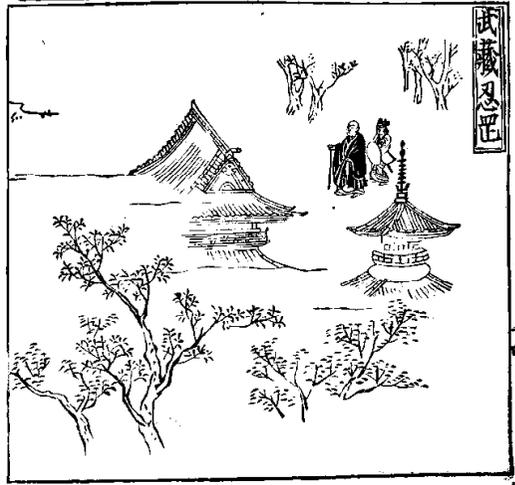
○三社権現：浅草寺の本尊である観音像を得た、土師真仲知命（はじのまつちのみこと）、檜前浜成命（ひのくまはまなりのみこと）、檜前武成命の主従三人をまつるところから、浅草神社のことを三社権現、また、三社明神とも言う。

○仁王門：浅草寺山門の宝蔵門。

○ごふくのちや屋：御福の茶屋。仲見世の仁王門よりのごころに茶屋があった。「二十軒茶屋は歌仙茶屋ともいへり。昔はこのごころの茶店にて、『御福の茶まゐれ』として参詣の人を呼びけるとぞ」（『江戸名所図会』巻五金龍山浅草寺）

○針ほどな：未詳。

●みやこのうしとらにあたつてながら山といへる名所あり。傳教大師、はじめて此山にのぼり、てんだいをひろめ給ふより、それよりして此山をひゑい山といふ。それを今むさしの江城にあたつてうしとらにうつして、とうゑい山と号す。慈眼大師寛永年中に取たて給ふ故、くわんゑい寺となづく。此所を忍の岡とも申なり。麓しのぼすの池あり。是は、水うみのたとへ、ちくぶ嶋をかたどり、池の中にべんざいてんの宮あり。花の比はくんじゆして花見にゆく、よしのにおとらじとて、うへ野こそむさしなからの山ざくら



(上14ウ)

●みやこのうしとらにあたつてながら山といへる名所あり。傳教大師、はじめて此山にのぼり、てんだいをひろめ給ふより、それよりして此山をひゑい山といふ。それを今むさしの江城にあたつてうしとらにうつして、とうゑい山と号す。慈眼大師寛永年中に取たて給ふ故、くわんゑい寺となづく。此所を忍の岡とも申なり。麓しのぼすの池あり。是は、水うみのたとへ、ちくぶ嶋をかたどり、池の中にべんざいてんの宮あり。花の比はくんじゆして花見にゆく、よしのにおとらじとて、うへ野こそむさしなからの山ざくら



(上15オ)

武蔵忍岡

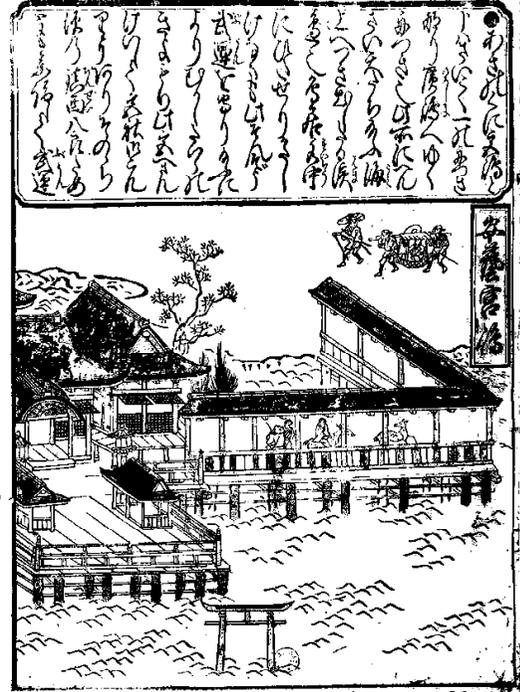
●みやこのうしとらにあたつてながら山といへる名所あり。傳教大師、はじめて此山にのぼり、てんだいをひろめ給ふより、それよりして此山をひゑい山といふ。それを今むさしの江城にあたつてうしとらにうつして、とうゑい山と号す。慈眼大師寛永年中に取たて給ふ故、くわんゑい寺となづく。此所を忍の岡とも申なり。麓しのぼすの池あり。是は、水うみのたとへ、ちくぶ嶋をかたどり、池の中にべんざいてんの宮あり。花の比はくんじゆして花見にゆく、よしのにおとらじとて、うへ野こそむさしなからの山ざくら

○忍岡：武蔵国。現、東京都台東区の西北部にある上野台地の旧称。江戸時代は東叡山寛永寺の境内で、現在は上野公園がある。 ○ながら山：近江国。現在の滋賀県大津市にある三井寺の背後にそびえる山。 ○傳教大師：日本天台宗の開祖、最澄の諡号。 ○てんだい：天台宗。 ○ひゑい山：比叡山。 ○とうゑい山：東叡山。寛永寺の山号。 ○慈眼大師：江戸初期の天台宗の僧で、徳川三代の政治顧問でもあった天海の諡号。 ○取たて：取り建て。建築して。 ○くわんゑい寺：寛永寺。 ○しのぼすの池：不忍池。 ○水うみ：琵琶湖。 ○よしの：吉野。 ○うへ野こそ：未詳。参考「さざ浪やしがのみやこはあれにしをむかしながらの山ざくらかな」（千載・春上・読人不・知・六六） ○はいかいしほつくしけり：俳諧師、発句しけり。





(中2オ)



(中1ウ)

安藝宮嶋

●あきのくに宮嶋と申は、さいごく一の舟つきなり。廣嶋へゆく舟つき也。此所にべんざい天たち給ふ。海上へつき出したる濱邊也。鳥居水中にひたせり。かたじけなくも、此そんぞう、武運を守り給ふにより、むかし、たいらのきよもり、此宮へさんけいして、宮社御こんりうあり。そのうち、源の鎮西八郎ためとも参詣して武運をいのり、くるがねの弓をおさめ給ふ也。れいげんあらたにましますれば、今の世にいたるまで渡海のため舟をよせ、きせんあゆみをはこぶ。女たいにておはしませば、五ぎやくの人をふかくいませ給ふ也。

行ちがふ舟にみやこの事とへばいふにいはいはれぬものぞありける

○舟つき：船着き場。 ○べんざい天：本朝三弁財天の一つ。「相州

江之島参照。 ○たいらのきよもり：平清盛。 ○御こんりう：御

建立。 ○源の鎮西八郎ためとも：源為朝。源為義の第八子。十三歳

の時に父に追われ、九州に勢力をはって、鎮西八郎と称した。 ○女

たい：女体。 ○五ぎやく：五逆罪。父、母、阿羅漢を殺すこと、僧

団の和合を破ること、仏身を傷つけて血を流すこと、の五つの罪。

○行ちがふく：未詳。『狂歌鑑賞辞典』（角川書店 昭59）では、広島県の昔話によく似た狂歌があることが紹介されている。

なんのむかしが あつたげな。 むかし じいとばあとむすめ  
 がおつたげな。 ある時 となりから もちを4つもろうた。 ひと  
 つわつてくうたら ひとつ残ったんで 3人が うたあよんで  
 ええ歌ができたもんがとることにした。

はじめにむすめが

「山がつが 松にゆの花とりそえて 思うようには いわれまい」とやった。

2 番めにばあが

「いき違<sup>う</sup> 舟に都のこととえば 思うようには いわれまい」とやった。

じいは 歌はよめんし もちはくいたしで すぐもちにくいついた。むすめとばあは 「歌もよまんでくうなあ いけん」いうて もちゆうひっぱったんで

「このもちを 口にいつぱいほうばって 思うようにはいわれまい」

とよんだんで、じいの歌が いちばんええいうことになって、じいがもちゆうもろうたげな。もうしむかし けつちりこ。

(村岡浅夫編『広島県民族資料集 第2集 口承文芸(1) 昔話』)

昭43、広島県山県郡)



(中2ウ)

●みやこひがし山のふもとに、祇園五頭てんわうのやしるあり。しげりたる松ばやしのうちにある。此松ばらをぎをんばやしといふ事、日本にかくれなし。しやだんのまへに石のとりぬたつ。かんじんぬんとがくあり。あたり二川有。四でうがはらといふ。此所にて上るり、かぶき、すもうのたぐひ、万みせもの多し。ちや屋あり。この天わうのみやは、一さいの諸病をはらひたまはんとて、此所にあとをたれ給ふにより、しよ人あゆみをなして病難をいのる。はんじやうの地なれば、みこのすゞふるおと、昼夜をこたる事なし。比はかみな月の比、参詣せし人の、

るすのみやや神はあがらせ玉すだれ



(中3オ)

●みやこひがし山のふもとに、祇園五頭てんわうのやしるあり。しげりたる松ばやしのうちにある。此松ばらをぎをんばやしといふ事、日本にかくれなし。しやだんのまへに石のとりぬたつ。かんじんぬんとがくあり。あたり二川有。四でうがはらといふ。此所にて上るり、かぶき、すもうのたぐひ、万みせもの多し。ちや屋あり。この天わうのみやは、一さいの諸病をはらひたまはんとて、此所にあとをたれ給ふにより、しよ人あゆみをなして病難をいのる。はんじやうの地なれば、みこのすゞふるおと、昼夜をこたる事なし。比はかみな月の比、参詣せし人の、

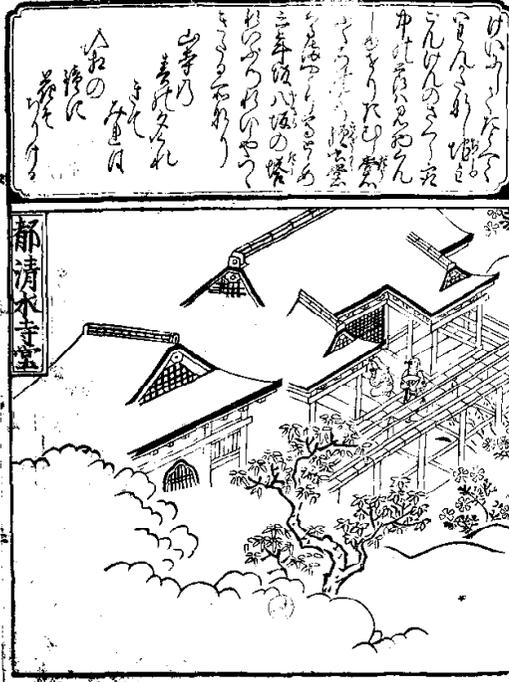
祇園牛頭天王

祇園牛頭天王

●みやこひがし山のふもとに、祇園五頭てんわうのやしるあり。しげりたる松ばやしのうちにある。此松ばらをぎをんばやしといふ事、日本にかくれなし。しやだんのまへに石のとりぬたつ。かんじんぬんとがくあり。あたり二川有。四でうがはらといふ。此所にて上るり、かぶき、すもうのたぐひ、万みせもの多し。ちや屋あり。この天わうのみやは、一さいの諸病をはらひたまはんとて、此所にあとをたれ給ふにより、しよ人あゆみをなして病難をいのる。はんじやうの地なれば、みこのすゞふるおと、昼夜をこたる事なし。比はかみな月の比、参詣せし人の、

るすのみやや神はあがらせ玉すだれ

○五頭てんわう：牛頭天皇。京都祇園社（八坂神社）などの祭神。もと祇園精舎の守護神。薬師如来、素戔嗚尊の垂迹という。○祇園ばやし：祇園林。○しやだん：社壇。神をまつたところ。○かんじんぬん：感神院。八坂神社は、慶応三年以前は、祇園感神院、または、祇園社と称した。○がく：額。「鳥居は石柱にして、感神院といふ堅額あり」（『都名所図会』祇園社）○四でうがはら：四条河原。○上るり、かぶき、すもう：浄瑠璃、歌舞伎、相撲。○みせもの：見世物。○ちや屋：茶屋。○はんじやう：繁盛。多くの人が集まること。○みこ：巫女。○すゞふるおと：鈴を振る音。○をこたる事なし：怠ることなし。○るすのみややく：未詳。旧暦十月に神は出雲へ行ってしまい、留守になった社、の意。



(中4才)



(中3ウ)

都清水寺堂

●みやこひがし山、清水寺の千じゆ観音は、ひぶつにてましませば、終にかいちやうなし。本だうみなみむき、おくのゐんにしむきなり。それより石だんを下りて谷にごわうのみやあり。宮の下より瀧水落る。これをおとはのたきといふ。日本にかくれなき瀧なり。しげりたる松山にがけづくりにしたるだうなれば、おもしろきけいにして、たとへていわんかたなし。地主ごんげんの桜、最中の節は見物ぐんじゆせり。たむら堂、ふくろの水、経書堂、くるまやどり、馬とゞめ、三年坂、八坂の塔、れいぶつ、れいしやつづきたる所なり。

山寺の春の夕ぐれきてみれば入相の鐘に花ぞちりける

○ひぶつ…秘仏。 ○かいちやう…開帳。 ○おくのゐん…奥の院

○おとはのたき…音羽の瀧。 ○がけづくり…崖造り。傾斜地に建物を張り出して作ること。 ○おとはのたき…音羽の滝。 ○がけづくりにしたるだう…崖造り(懸け造り)にした堂。 ○地主ごんげん…寺院の境内で、その寺院の守護神としてまつてある神社。また、その祭神。特に、中世以後、清水寺のものを指すことが多く、桜の名所として名高い。「それ花の名所多しといへども。大悲の光色添ふ故か。

この寺の地主の桜にしくはなし」(謡曲・田村) ○田村堂…「田村堂には田村將軍・鈴鹿権現・行叡・延鎮等の像を安置す」(『都名所図会』音羽山清水寺) ○ふくろの水…「鼻水は中門の西にあり。霊泉にして地中より湧き出づる事、寒暑に絶えず」(『都名所図会』音羽山清水寺) ○経書堂…清水寺の塔頭。三年坂の上にあり、聖徳太子が創建したという。(『都名所図会』経書堂)読みは「きょうかくどう」

○くるまやどり、馬とどめ：『都名所図会』音羽山清水寺図の左隅にも見える。ここで車を降り、馬を留めて、徒歩で参詣したのである。  
○三年坂：清水寺から八坂へ通じる、転ぶと三年の内に死ぬという俗伝のある坂。産寧坂とも。○八坂の塔：八坂法観寺にあった五重塔。○山寺のく：参考「山ざとのはるの夕暮きて見ればいりあひの鐘に花ぞ散りける」(新古今・春下・能因・一一六)



(中4ウ)



(中5オ)

京嵯峨

●みやこのにし、きたさがといふ所あり。此所二日本一のしやかのま  
 します事、三国にかくれなし。此しやかだうのまへに、ちや屋町有。  
 あたごまいり、のぼりくだりの山みちにくたびれ、あしをやすめんと  
 て、はたごをあつらへてしよくすにより、まいりげかうをとむるわか  
 き女にそでをひかれて、これもあたごのちしやうなりとて、よろこぶ。  
 むかしは、北さがにて、女おもひくに出たち、ぼうしをかぶりおど  
 る。おとりぶりのよきをみて、それくつまにさだむ事あり。七  
 つになる子さへいたいけな事をいふて、つまがほしは、とうたふたり。  
 よしの、はつせの花よりも、我おもふものはみたしといへり。あたご  
 山は、此ちや町より五十町の坂あり。難所なれば、かごにてもものぼる  
 ゆへ、かしかごあり。

ひだるきに今ぞあたごの山ほりてさかのちや屋に新枕せん

○此所二…五台山清涼寺。「儼然安置の釈迦像は三国伝来と称し、著  
 世の靈物なるを以て俗に嵯峨釈迦堂と曰ふ」(『増補大日本地名辞書』  
 清涼寺) ○あたごまいり…愛宕参り。愛宕権現に参詣すること。特  
 に陰曆六月二四日にお参りする千日詣をいう。 ○はたご…旅籠。旅  
 館の食事。 ○しよくす…食する。 ○まいりげかう…神社に参詣す  
 る人。 ○ちしやう…馳走。もてなし。 ○北さがにて…「北嵯峨  
 へをりやれの。北嵯峨の踊は、つぐら帽子をしやんと着て踊る振りが  
 面白い。吉野泊瀬の花よりも紅葉よりも。戀しき人は見度い物じや。  
 所々御参りやつてとう下向めされ。科をばいちやが負ひまらしよ。」  
 (鷺、小舞「七つに成る子」) ○かご…駕籠。 ○かしかご…貸

し駕籠。　○ひだるきに…未詳。



(中6才)



(中5ウ)

都西廣澤池

●都のにし、さかのゝほとりに廣沢の池といへるべうぐとしたる野中に池あり。このいけちかきほとりに、きぬがけ山、おむろ、ふじのさと、なるたき、たかを、とがのをや、あたご、おぐら山、さかのしやかだう、うづまさなどゝいへる名所有。うちひらきたる所なれば、八月十五夜二月見とて、此池のほとりへ行人多し。此池にむかしは水中にぬしありて人をとれたるを、たつとき知者のふうじこめ給ひて、それより以来、人をとらずと申ならはしけり。池の水終にかわきたるためしなし。ある哥に、

山のはに雲のよこぎる宵のまは出ても月ぞなをまたれける

- きぬがけ山…衣掛山。 ○おむろ…御室。 ○なるたき…鳴滝。
- たかを…高雄。 ○とがのを…梅尾。 ○おぐら山…小倉山。 ○うづまさ…太秦。 ○此池に…「おびとり池〔広沢のひがしなり、路のかたはらにくぼみたる所あり、是なり。むかしはいと深くて、此池の霊帯と化して人を取りしとぞ〕〔都名所図会〕」○山のはに…新古今・秋上・道因・四一四



(中7オ)



(中6ウ)

山城國愛宕

●愛にわうじやうのいぬいにあたつて、高山あり。あたご山と号す。峠に將軍地蔵の御たちあり。かたじけなくも此御山を太郎坊十二天狗しゆごし給ふ也。火うち坂、権現堂有。そのかみ、かんせう丞のおとご、四へいのおとごをこんげんといわひ申なり。山中にきよ瀧として山川あり。此川ふもとにおちて大井川、桂川といへり。一の鳥居よりかねの鳥居迄五十町の山なり。洛中女などまいりし折から、火打坂などにて手をひかるゝ事をたのむ。これもあたごの御りしやうとよるこぶ也。

おとにのみありと聞つゝきよ瀧のわたらば袖にかけもみえなむ

○わうじやう…：王城。都。 ○將軍地蔵…：坂上田村麻呂が東征のとき、戦勝を祈つて作ったことからおこつたという地蔵菩薩。勝軍地蔵。  
 ○太郎坊…：京都の愛宕山、鞍馬山、富士山などに住んでいたという大天狗。 ○十二天狗…：知切光歳『天狗の研究』（大陸書房 昭50）所引「天狗経」に「南無大天狗小天狗十二天狗有摩那天狗数万騎天狗先ず大天狗には…：…と見える。 ○しゆご…：守護。 ○火うち坂、権現堂…：「清滝川・渡猿橋・火燧権現は、十七町目にあり」（『都名所図会』「愛宕山のやしる」） ○かんせう丞のおとご…：菅原道真。 ○四へいのおとご…：藤原時平。 ○一の鳥居…：山麓の右京区嵯峨鳥居本町にある。 ○かねの鳥居…：「鉄の華表の額は表を朝日山、裏を白雲寺と書す」（『都名所図会』「愛宕山のやしる」） ○御りしやう…：御利生。 お恵み。 ○おとにのみ…：参考「ありとのみおとにききつつおとはがわたらば袖にかけもみえなん」（新古今・恋一・読人不知・一

○五五、「おとにのみありとききこしみよしのの滝はけふこそ袖にお  
ちけれ」(新古今・恋一・読人不知・九九一)



(中8才)



(中7ウ)

京吉田

●みやこ東山、しら川のほとりに、よし田村といふ所あり。此所によしだのとして、日本国中の神々をくわんぜう申せし宮あり。本社は、春日大明神にてまします。かぐらおかよりにしにあたり。ひがしは、ながら山、うりう山、又しゝが谷、なんぜんじ、しやうぐん塚■とぞ。ひゑきたは、大はら、くらま山、やせのさと、松が崎、上加茂まへにかも川のながれありて、よきけいなり。むかしは、よしだのながしといふ公家すみ給ふ所なり。むさしのすみだ川にて死に給ふ梅若丸も此所より出たまへり。ゑんごくより京へ上りし順礼さんけいして、此やしるにてあしをやすむ。

なにてたてるよしだのさとのつえなればつくともつきじ君が万代よしだにつゞきて岡崎といへる名所有。下賀茂のもりもにしにつゞく。此所にみたらし川とて清水あり。

○白川：京都市左京区を流れる川。 ○よしだの：吉田殿。吉田神社。藤原氏が平安京に氏神である春日大社を勧請した。 ○かぐらおか：神楽岡。 ○ながら山：長柄山、瓜生山、鹿ヶ谷、南禅寺、將軍塚。 ○ひゑ：比叡。 ○大はら：大原、鞍馬山、八瀬の里。 ○むかしは：「われは都北白河、吉田の某と申せし人の、ただひとり子にて候ひけるが、……」（謡曲「隅田川」） ○ゑんごく：遠国。 ○なにてたてる：拾遺・神楽歌・平兼盛・六一五。この吉田の里は、近江国愛知郡吉田郷、現、滋賀県犬神郡豊郷町吉田の辺り（吉原栄徳『和歌の歌枕・地名大辞典』おうふう・平20）。





ほうぎよづくり…宝形造り。 ○関白秀吉公：豊臣秀吉は、三十三間堂の隣に、大仏殿方広寺を建立した。挿絵の見開き左は、この大仏殿を描いたものである。「楼門には金剛力士の大像を置き、長は一丈四尺なり。…廻廊は南北百二十間、東西百間なり。堂前に建つる石灯笼には列国諸侯の名を刻む。仏殿の敷石また正面石垣の大石には、国々出所の名あるいは諸侯の紋所あり」(『都名所図会』「大仏殿方広寺」)

○くわいらう…廻廊。 ○きしん…寄進。 ○きやうをさます…興醒めする。あまりに大きさに、かえって度肝を抜かれたということか。



(中11才)



(中10ウ)

京八幡

●いわし水正八幡宮、此おとこ山にあとをたれて、源氏御代百王百代守り給はんとの御ちかい也。此山のふもとをはしもと、やわたと云。これより坂道石段をのぼりて宮参りをする。いせ、やわた、春日の御事は、日本一の大社也。いわし水は、おとこ山の中にあり。はとのみねともいふ也。毎年八月中旬に放生會とてまつりありて、ふもとの川へ生たる魚鳥をはなす。此おとこ山の女郎花いわれありて名所なり。八幡山さか行神のめぐみにて千世ともさゝみねの松が枝  
 女郎花うしとみつゝぞ行過るおとこ山にしたてりとおもへば  
 はんじやうのれいちにて、我てうの武家、此御神をさせいして弓矢のほまれをねがふ。かるがゆへに、神、参だうにさつゝの鈴のおとたへず。あゆみをはこぶ人民、聞しにまさるめいしよ也といふ。

○おとこ山：京都府八幡市の北部にある山。淀川を隔てて天王山と対する。京都への西の関門である。 ○あとをたれて：跡を垂れて。  
 ○はしもと、やわた：橋本、八幡。 ○はとのみね：鳩の峰。「高頂鳩之峰は八幡宮の西にして抽海一四〇米突あり」(『増補大日本地名辞書』男山) ○放生會：石清水八幡宮の法会の一つ。例祭として陰曆八月一五日に行なわれる。生魚、生鳥などを山や川に放ち、天皇および將軍の幸福、天下泰平を祈願する。文明一八(二四八六)年以後断絶するも、延宝七(二六七九)年再興される。 ○此おとこ山の女郎花いわれありて名所なり：「女郎花塚(志水の南五町にあり)人皇五十一代平城天皇の御時、小野頼風といふ優男、男山の麓にすめり。京に女を持ちて互ひに連理の契り浅からざりしに、かの女人はたへ尋ねゆ

きて頼風が事をとふ。あたりのさがなきもの答へて、このほどはじめたる女房ましますが、その所へ行きたまふといふ。女うらめしくおもひ、胸せまり、遂に放生川の端に山吹かさねの衣ぬぎ捨て、身を投げて空しくなる。その衣くちて女郎花生ひ出でたるとなり。頼風この花の本に立ちよれば女郎花の恨みたる風情あり。頼風これおわはれみて、ともに身を投げて死しけり。その所を涙川といふ。放生川の上なり。されば漢の何文が女の塚に女郎花の生ひけるも思ひ出だされ、『古今』の序にも男山のむかしを思ひ出でて、女郎花の一時をくねるとかけり。

『古今』 女郎花花うしと見つつぞゆきすぐるをとこ山にしたてりと思へば ふるのいまみち 哀れなり 餓鬼にもならず 女郎花 斑竹

(『都名所図会』「女郎花塚」) ○八幡山々々参考「春日山さか行く神のめぐみもて千世ともささし峰の松が枝」(新後拾・神祇・藤原良経・一五〇九) ○女郎花々々古今・秋上・布留今道・二二七 ○きせい

…祈誓。 ○さつくの鈴のおと…「颯々の鈴の聲、ていとうの鼓の

音」(謡曲「雨月」)



(中12才)



(中11ウ)

鳥羽戀塚

●みやこのみなみにあたりて、むかし、こうぼうだいしすみ給ひし東寺といへる大がらの寺あり。此所に、らしやうもんとて、むかし鬼神の住し門あり。此所に四つ塚とて名所あり。それにつきて鳥羽といひし在所あり。うしをつかふ所也。海道につき田のくろに、ちいさきつかあり。これは、むかし、よしある人の女らうをこひにして、うきみをやつし、此鳥羽のさとにてむなく成しを、ちちうにうづみ、つかをつきおきしを、于今とはこのひづかといふなり。そのかたはらに、あきの山といふ所あり。これも田のくろに分しかきあげの高き所にはやしあり。これをあきの山といへり。鳥羽院の御代の事なり。かつら里にしにあたれり。鳥羽とかつらとの間にながれあり。かつら川といふ名所也。此川上を大井川といふ。

大井川うかべるふねのかざり火にをぐらの山もなのみ也けり  
大井川、かつら川鮎の名物也。

○戀塚：恋の苦しみに耐えかねて、または恋愛沙汰の犠牲となつて死んだ人を葬つた塚のこと。京都の鳥羽の恋塚が著名。 ○こうぼうだいし：弘法大師。 ○東寺：…京都市南区にある真言宗東寺派の総本山、教王護国寺の通称。 ○大がらん：大伽藍。 ○らしやうもん：羅生門。平城京・平安京などの都城の正門。朱雀大路の南端にあつて、京の内外を分ける。「九条の羅生門にこそ鬼神の住んで、暮るれば人の通らぬとこそ申し候へ」(謡曲「羅生門」) ○四つ塚：「四塚は辻にて西は藪渡(桂川)に向ひ斜に馳せ、南は上鳥羽村鴨川まで直路にて造道と称す、俱に撰州に趨る西国街道也」(『増補大日本地名辞書』羅城門

址) ○うしをつかふ所也：鳥羽街道や竹田街道は、牛車の往来が日常的であつた。「竹田街道を通ふ車、牛は毎日に伏見より都へ貨物を積たる也。炎暑には夜を日にかへて牽通ふは、牛の疲れざる要意にして、牛を飼ふのならひなりとぞ」(『拾遺都名所図会』竹田・挿絵)

○海道：街道。 ○つき田：埋め立てて開墾した田地。 ○これは、むかし：…所謂、文覚発心譚を指す。「かのくびすてし、くさむらは、いまのこいづか、これなるべし、また重元の屋敷をば、あきのやまとぞ申ける」(「恋塚物語」) ○あきの山：京都伏見区竹田真幡木町あたりの古地名。鳥羽利休内にあつたという。「秋の山」(小枝橋半町ばかり南にして、茶店の向ふなり。鳥羽法皇城南離宮を營給ひし時、四季の風景をつくり、紅葉を多く植させ給ふ所を秋の山といふ、今纔の岡山遺れり」(『都名所図会』秋山) ○かつらの里：京都市西京区桂川右岸の地。 ○大井川：…後撰・雑三・在原業平・一二三二 ○大井川、かつら川鮎の名物也：…水上に踊る若鮎の鉤を争ふて牽動すを楽み、小石がちなる所へは網を敷て夜に入るまでも狩あるき」(『都名所図会』大堰川)、「年魚は此河の名産にして、いにしへは毎に天子へ上るよし、和歌に見へたり。今も領主より干鮎などにして上らるゝ事むかしにかはらず」(『拾遺都名所図会』桂川)



(中13才)



(中12ウ)

**布引瀧**

●布引のたき、きぬかけ山などいへる名所あり。このたきをぬのびきのたきと名づくる事は、はるかに見あげたるいわのはさまより、さかおとしに水おちしにより、うへくがた聞しめしおよばれ給ひて、此瀧の元に歩みをなして見物あり。聞しにまさるめいしよなり。そもく我てう、たきの名所多し。きしうになちのたき、みのくくにやうらうのたき、つゞみのたき、おとなしのたき、おとほのたきなどさまく名所のたきあり。その中にもわけて見所あるたきなり。

山風はふけどふかねど白波のよるか岩ねは久しかりけり

○布引のたき：神戸市中央区葺合町を流れる生田川上流の滝。 ○きぬかけ山：衣掛山。

○さかおとし：逆落とし。けわしい崖、急坂などを落ちくだること。 ○うへくがた：高貴な身分の方々。 ○きしうになちのたき：紀州国那智の滝、美濃国養老の滝、肥後国鼓の瀧、紀伊国など音無の瀧、山城国音羽の瀧。 ○山風はく：新古今・賀

・伊勢・七二一



のための島。経島。○あわぢしま、あわのなると…淡路島、阿波の鳴門。○むかし、大唐の楽天：謡曲「白楽天」は、白楽天が渡来し、筑紫の海上で小舟に乗って釣りをする老人に出会い、その漁翁は実は住吉明神の化身で、最後には、神風を起こして楽天を唐土へ吹き戻す、という筋立て。「そもそもこれは、唐の太子の賓客、白楽天とはわがことなり、さてもこれより東にあたつて國あり、名を大日本と名付く、急ぎかの土におし渡り、日本の知恵を計れとの宣旨に任せ、只今海路に赴き候」(謡曲「白楽天」) ○みめうの橋：住吉大社を象徴するものとしてよく描かれる太鼓橋を指す。「みめう」は、微妙(＝美しさや味わいが奥深くたえなること)の意か。○君が代の…参考「きみがよのひさしかるべきためしにやかみもうゑけむすみよしのまつ」(詞花・賀・読人不知・一七〇)。『新編国歌大観』では、「君が代の久しかるべきためしにはかねてぞうゑし住吉の松」(古今和歌集灌頂口伝・四七〇)、『俳文学大系』でも、「君が代のひさしかるべきためしにはかねてぞ植し住吉の松」(滑稽太平記・一九五)とあり、『和国名所鑑』と同じ形の異伝もあったようだ。



の舞。「舞台は池水の上に架し、聖霊会の時伶人此に舞樂を奏す、此寺の舞樂は本邦古樂中絶の際、伝承僅に此に存し、後世をして継ぐ所あらしめたりと云ふ」(増補大日本地名辞書・四天王寺) ○ちやうす山：大阪市天王寺区の天王寺公園にある丘。古称は荒陵(あらはか)。大坂冬の陣では徳川家康が陣を置き、夏の陣では真田幸村が討死した。

○かうしんだう：庚申堂。四天王寺南門の南にあった。「当所は日本最初の庚申にして靈驗最も他に超えたり」(浪華の賑ひ・庚申堂)

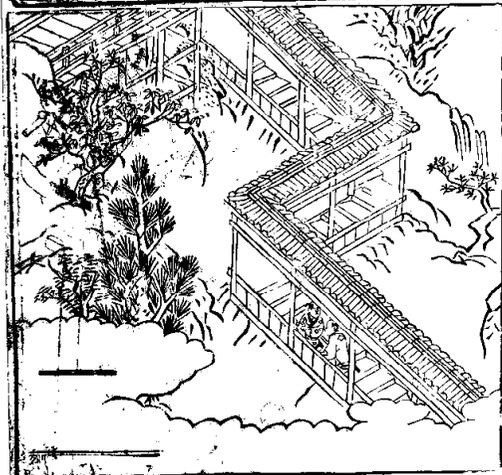
○ばんだいの池：万代の池。(住吉名勝図会) ○おのゝ小町がつか：『住吉名所図会』では、阿倍野街道に小町塚があるとの記述がある。

●やまとの国はせ寺のくわん音は、卅三所の内にて、とりわけいぶつにてましませば、此山中におびたゞ敷仏閣をこんりうあり。真言ひみつのだうぢやう也。本堂へ行に、山のそばにらうかあり。長サたしかにしらず。そのけいおもしろし。東国マの順札の札所也。此くわんをんへまふで、うたをよみてきせいをし、現当の二世をねがふりしやうあり。かたふしてすくひとり給はんとのちかひあまねし。むかし、あべのなまかる、ちよくをかふむりて大唐へわたり給ふに、みかど、日本のちゑをはからんとて、囲碁くだしむ。其後、やばたいの詩を作りてよましむ。なか丸きいのおもひをなして、我てうにむかい、このくわん音にきせいをかけ給へば、こくう、蜘蛛となりてまひさがり、いとを引てよましめ給ふにより、だいたうのみかどほうびして、日本小国なりと申せども、かゝる知者のありけるよとかんじ給ふと也。



(下3ウ)

○長谷寺：大和国、現、奈良県桜井市初瀬にある真言宗豊山派の総本山。本尊十一面観世音菩薩は平安時代には、貴族、特に女性の信仰が厚かった。西国三十三所の第八番札所。○れいぶつ：霊仏。○真言ひみつ：広義では真言密教の秘密の法門をいうが、一般には三密のなかの口密をいう。真言陀羅尼は深妙幽遠であつて、仏の内証秘密の法であることからいう。○だうじやう：仏道修行の場所。仏をまつり仏の教えを説く所。寺院。○らうか：廊下。廻廊を指す。○かたふして：確実に。○すくひとり給はんとのちかひ：お救いとなりなさろうとする誓い。観音の本誓を指す。○むかし、あべのなまかる：唐へ渡つた吉備真備が、才芸(文選、囲碁、邪馬臺の詩)を試



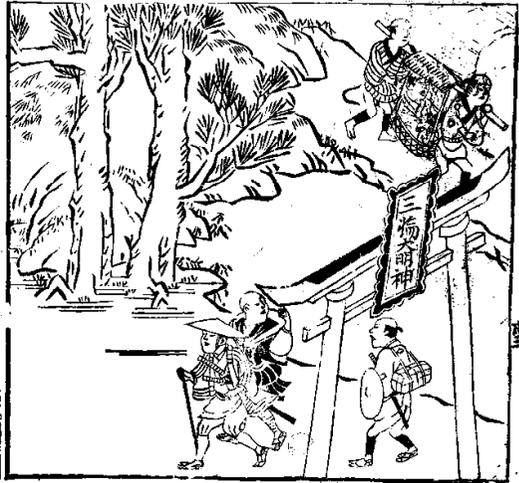
(下4オ)

長谷寺  
●やまとの国はせ寺のくわん音は、卅三所の内にて、とりわけいぶつにてましませば、此山中におびたゞ敷仏閣をこんりうあり。真言ひみつのだうぢやう也。本堂へ行に、山のそばにらうかあり。長サたしかにしらず。そのけいおもしろし。東国マの順札の札所也。此くわんをんへまふで、うたをよみてきせいをし、現当の二世をねがふりしやうあり。かたふしてすくひとり給はんとのちかひあまねし。むかし、あべのなまかる、ちよくをかふむりて大唐へわたり給ふに、みかど、日本のちゑをはからんとて、囲碁くだしむ。其後、やばたいの詩を作りてよましむ。なか丸きいのおもひをなして、我てうにむかい、このくわん音にきせいをかけ給へば、こくう、蜘蛛となりてまひさがり、いとを引てよましめ給ふにより、だいたうのみかどほうびして、日本小国なりと申せども、かゝる知者のありけるよとかんじ給ふと也。

○長谷寺：大和国、現、奈良県桜井市初瀬にある真言宗豊山派の総本山。本尊十一面観世音菩薩は平安時代には、貴族、特に女性の信仰が厚かった。西国三十三所の第八番札所。○れいぶつ：霊仏。○真言ひみつ：広義では真言密教の秘密の法門をいうが、一般には三密のなかの口密をいう。真言陀羅尼は深妙幽遠であつて、仏の内証秘密の法であることからいう。○だうじやう：仏道修行の場所。仏をまつり仏の教えを説く所。寺院。○らうか：廊下。廻廊を指す。○かたふして：確実に。○すくひとり給はんとのちかひ：お救いとなりなさろうとする誓い。観音の本誓を指す。○むかし、あべのなまかる：唐へ渡つた吉備真備が、才芸(文選、囲碁、邪馬臺の詩)を試

され、客死して鬼となっていた阿倍仲麻呂や日本の神仏（蜘蛛が糸で教える）の助けで切り抜けるという説話がある（類聚本系江談抄卷三第一「吉備入唐の事」など）。○こくう：虚空蔵菩薩のことか。「虚空蔵」は、虚空がすべてを蔵するように、無量の智慧と福德をそなえているの意で、人々にこれらを与え、願いを満たし救うという菩薩のことである。

○三輪の明神は、やまとの三輪の山にあとをたれ給ふ。御しんたいは、たくせんにまかせ、二もとの杉也と申つたへし。むかし、げんびんといひしやもん、此所へまふで給ひて、つやし給ふに、明神女にへんじて、此そこのころもをこひ給ふ時、げんびんすなわち女性にころもをあたへ給へば、われは、これ三輪の御神也。かさねてたづね給はば、杉たてる門すみかなりとて、けすがごとくにうせ給ふ。げんびん、つげにまかせ。此山中へわけ入てみれば、二もとの杉の枝、ころものかゝりたる有。見れば、女性にあたへし我ころも也。これこそ三輪の明神也とて、たつとみ給ふと也。此二もとの杉のもとに宮有。山中なればしんくとしてさもありがたし。



(下4ウ)

巴郡山中の三輪の山にありては、御しんたいは、たくせんにまかせ、二もとの杉也と申つたへし。むかし、げんびんといひしやもん、此所へまふで給ひて、つやし給ふに、明神女にへんじて、此そこのころもをこひ給ふ時、げんびんすなわち女性にころもをあたへ給へば、われは、これ三輪の御神也。かさねてたづね給はば、杉たてる門すみかなりとて、けすがごとくにうせ給ふ。げんびん、つげにまかせ。此山中へわけ入てみれば、二もとの杉の枝、ころものかゝりたる有。見れば、女性にあたへし我ころも也。これこそ三輪の明神也とて、たつとみ給ふと也。此二もとの杉のもとに宮有。山中なればしんくとしてさもありがたし。



(下5オ)

三輪大明神

○三輪の明神は、やまとの三輪の山にあとをたれ給ふ。御しんたいは、たくせんにまかせ、二もとの杉也と申つたへし。むかし、げんびんといひしやもん、此所へまふで給ひて、つやし給ふに、明神女にへんじて、此そこのころもをこひ給ふ時、げんびんすなわち女性にころもをあたへ給へば、われは、これ三輪の御神也。かさねてたづね給はば、杉たてる門すみかなりとて、けすがごとくにうせ給ふ。げんびん、つげにまかせ。此山中へわけ入てみれば、二もとの杉の枝、ころものかゝりたる有。見れば、女性にあたへし我ころも也。これこそ三輪の明神也とて、たつとみ給ふと也。此二もとの杉のもとに宮有。山中なればしんくとしてさもありがたし。

三輪の山いかに待みむ年ふともたづぬる人もあらじと思へば

○三輪：奈良県桜井市東北部。三輪山には大物主神を祭る大神(おのみわ)神社がある。 ○御しんたい：御神体。 ○たくせん：託宣。

○二もとの杉：「はつせ河ふるかはのべにふたもとあるすぎ年をへて又もあひ見むふたもとあるすぎ」(古今・雑体・読人不知・一〇〇九) ○むかし：謡曲「三輪」は、大和国三輪に住んでいた玄賓僧都のいおりに、毎日櫛と鬘伽の水を持つてくる女が、玄賓に衣を請い、彼が与えたが、実は、その女は、三輪の神の化身であったという筋立て。 ○つや：通夜。徹夜で勤行・祈願すること。 ○杉たてる門：

「わがいははみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど」(古今・雑下・読人不知・九八二) ○たつとみ：尊び。 ○三輪の山いかに待みむ：古今・恋五・伊勢・七八〇

●やまとの國よしの山といひしは、我てう一のさくららの名所也。三月  
 中じゆんの比は、山谷もあらしに花ちりしきて、山も白々見えければ、  
 ある人のうたに、みやこにてめづらしく見るはつ雪はよしのの山には  
 やふりにける、とよみしごとく、花のちる比、風にふきちらしたるけ  
 しき、散まよふ花のよそめはよしの山あらしにさわぐみねの松風、と  
 よみしもことほり也。ふもとによしの川とてながれあり。山川ゆへは  
 やし。よしの大みねより切出せし木を、いかだにしてながす。此よし  
 の山は、ざわうごんげんのたち給ふ宮社、山中にあつて、つねはしん  
 くとしたる所也。さるによつて、こざくらぼうといへる天狗のすむ  
 山也。此山中は、さくら、かやなどの大木多し。きさ山、中山、小川、  
 御舟山、鹿、水分山、岩根、青葉山、みたけときさ山との間一里あり。  
 をくのおまへと申、八十八町をく也。

大和吉野



(下5ウ)

●よしのの山は、奈良吉野郡の山。今の吉野山だけでなく、金峯山、水  
 分山、高城の山、青根が峰など、広範囲の山の総称であつたと考えら  
 れる。平安時代後期以降、桜の名所として強く意識されるようになって  
 きた。○みやこにて〜：拾遺・冬・源景明・二四三②めづらしと見  
 る、⑤ふりやしぬらん、拾遺抄・一四七③はつ雪を④吉野の山は⑤  
 ちりまがふ、⑤峰の白雲 ○散まよふ：新古今・春下・藤原頼輔・一二二①  
 ちりまがふ、⑤峰の白雲 ○よしの川：紀ノ川上流部を奈良県でい  
 う。大台ヶ原山を源とし、吉野町で高見川を合わせ、極端な曲流をな  
 し、宮滝を経る。「吉野河いは浪たかく行く水のはやくぞ人を思ひそ



(下6オ)

○よしの山：奈良吉野郡の山。今の吉野山だけでなく、金峯山、水  
 分山、高城の山、青根が峰など、広範囲の山の総称であつたと考えら  
 れる。平安時代後期以降、桜の名所として強く意識されるようになって  
 きた。○みやこにて〜：拾遺・冬・源景明・二四三②めづらしと見  
 る、⑤ふりやしぬらん、拾遺抄・一四七③はつ雪を④吉野の山は⑤  
 ちりまがふ、⑤峰の白雲 ○散まよふ：新古今・春下・藤原頼輔・一二二①  
 ちりまがふ、⑤峰の白雲 ○よしの川：紀ノ川上流部を奈良県でい  
 う。大台ヶ原山を源とし、吉野町で高見川を合わせ、極端な曲流をな  
 し、宮滝を経る。「吉野河いは浪たかく行く水のはやくぞ人を思ひそ

をくのおまへと申、八十八町をく也。  
 白川の梢をみてぞなぐさむるよしの、山にかよふころは

めてし」(古今・恋一・紀貫之・四七一) ○大みね…大峰山。○ざわうごんげん…役行者が奈良の金峯山で修行中、感得したという悪魔降伏の菩薩。金峯山寺蔵王堂に本尊としてまつられている。○こざくらぼう…小櫻坊。知切光歳『天狗の研究』(大陸書房 昭50)所引「天狗経」に「吉野皆杉小桜坊」の名が見える。同書<sup>333</sup>頁も参照。○きさ山…象山。○小川…「象の小川(水源青根嶽よりながれて、外象橋を過ぎて吉野川に入る)」(大和名所図会) ○鹿…参考「樫尾 古は鹿塩に作り、又加志能布と呼ぶ、国樺村の大字也。宮滝の対岸(吉野川南側)にあたる」(増補大日本地名辞書) ○水分山…「水分山 水分峰に吉野水分神あり」(増補大日本地名辞書) ○岩根…未詳。○青葉山…「同所(義経鑑懸松)に青葉の鳥居とて、左右よりはへしげりたる並木あり。この所青葉山といひて名所なり」(吉野山独案内) ○みたけ…御嶽。金峰山の異称。○をくのおまへ…奥の御前で、吉野山の奥の手前辺りを言うか。「いづくにてかぜをも世をもうらみましよしのおくも花はちるなり」(千載・雑中・藤原定家・一〇七三)『吉野の奥』は、奥の千本よりも奥を言うのだろうか。その峰続きには、安禅寺の奥の院、俗に、吉野の奥の院と言われた宝塔院の跡やさらに、その奥に、西行庵の跡などがある」(吉原栄徳『和歌の歌枕・地名大辞典』おうふう・平20、「吉野(山)の奥」) ○白川の…山家集・春・六九(⑤かよふ心を)



ひびき：鈴の響き。鈴は、風鐸などを指すか。○りよ人：旅人。  
○とう大じ、さい大寺：東大寺、西大寺。○いにしへのゝ：詞花・  
春・伊勢大輔・二九







(下10才)



(下9ウ)

手喰之門

●てがいの門といへるは、日本一の門にして、その名高し。おのゝ小町、此ならのみやこにきたりて、てがいの門にたちやすらひ、此所さすがにみやこなれば、山谷野草のゑん見おもしろしとて、こゝろをうつし給へり。その所を于今小町がいあとと云也。ならのみやこに、にし、ひがし、みなみは山多くして、れいぶつ、れいしや多し。北は、べうかくとしたる平地にしてながれもあり。よしの、初瀬の花の比、立田のみぢの秋の月、ひばら、松ばらわけ行て見物多き折ふしは、此ならのみやこへたちより、かなたこなたを見物するこそ、げにことほりとぞ聞えける。

あさみどり糸よりかけてし露を玉にもぬける春の柳か

春日のゝ飛火の野守出て見よいまいくかありてわかになつみけん

○てがいの門：輾轂門(転害門)。「東大寺西北の惣門といふ。俗に景清門ともいふ」(『大和名所図会』) ○ゑん見：遠見。遠望すること。

○いあと：井(の)跡の意か。「威徳井(押し紙町東側、人家の傍にあり。また従弟井(いとこゐ)とも書く。むかし小野小町、奈良を見めぐりける時、この水をつまみよめる、したしが同じながれや汲みつらんおととひの子やいとこゐの水) この歌、小町が詠みしと云ひ伝へり。しかれども撰集になし。後人考へあるべし」(『大和名所図会』) ○れいぶつ、れいしや：霊仏、霊社。 ○あさみどり：古今・春上・遍昭・二七 ○春日のゝ：古今・春上・春上・読人不知・一八 (⑤わかになつみてむ)



(下11才)



(下10ウ)

奈良二月堂

● ならば、むかしのきやうにして古跡多し。こゝに二月堂とて、年ごと一度二月におこなひして、牛王のまぶりを出す所なり。堂のまへに池のあとあり。つねに水なく、きたうの後、此池あとに立■かちをして、わかさく〜とよび給へば、そのまゝ水わき出る。其水にてこの牛王をし出す。諸国にわたつてあまねくさいなんのぞきしまぶりとなつて、人これをもちゆるなり。さる所に、死れう下女よなくきたりて、主人の本妻をねらふ也。しかれども、此二月堂の牛王を身にはなさずまぶりにかけしゆへ、とりころす事あたはず。あるとき、女ぼうゆどのに入てゆをあびしに、かの下女が死れうきたつて、われをころせしむくひに、そのほうがいのちとりぬとてとびかゝり、くいころししとなり。これ二月堂の牛王をかけざるゆへなり。かゝるたつときふしぎの牛王をおろそかにすべからずとて、に今たつとみし也。

○むかしのきやう：昔の京。 ○牛王のまぶり：牛王の守り。東大寺

二月堂から出す牛王の守札。弘法大師空海の作つた霊符といい、これを水に映し、その水を飲むと悪疫がなおるといふ。 ○きたう：祈祷。

○かぢ：加持。 ○わかさく：若狭、若狭。若狭の遠布明神との縁に拠る。「この間に内外の僧問答をなし、若狭若狭と唱ふる詞の下よりわき出づる水をとり」(『奈良名所八重桜』二月堂) ○さる所に

参考、宝暦二(一七五二)年刊『古今弁惑実物語』卷二「幽霊二月堂の牛王を懼事」。有徳の百姓が、本妻がある身ながら、召使いの下女と懇ろになり、嫉妬した本妻が、下男に下女を殺させた。その下女は、死霊となつて復讐に本妻を殺そうとするが、門戸に二月堂の牛王

が貼られているので近づけない……云々という怪談話。延宝五年刊『諸  
国百物語』卷三の七「まよひの物二月堂の牛王にをそれし事」にも似た  
ところがある。



(下11ウ)



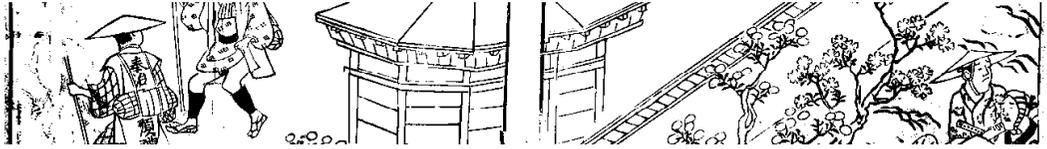
(下12オ)

奈良春日野

●三かさ山、春日大明神の宮社は、我朝に三所の大神宮なり。武運のまもり給ふ御神なれば、貴賤あゆみをはこびてさまぐのほうへいをなす。惣じてならのきやうに、かの鹿多くして、余国の犬のごとし。是春日大明神の使者成とて、此所の人民おそれをなす。そのいわれは、ひたちの國かしま大明神、鹿にのりて一夜に春日山へかけり給ふなり。それを、このれい地にくわんでう申て、うき雲の宮とあがめたてまつる。本地かしま大明神なり。これによつてたびだつ人門出をいわふて、かしま立といふ也。道のはか行事をいわひてなり。

けふまつるしるしにとてや石上みかさのさとはあまくだりけん

- 三かさ山：奈良県東部、高窓大和若草大和の間にある山。ふもとに春日大社がある。 ○我朝に三所の大神宮なり：「春日は撰関家の氏神にして、中世八幡は武家幕府の崇奉厚かりしにより此二神を以て伊勢大神宮に垂等せしめ三社の称あり」(『増補大日本地名辞書』)
- ほうへい：奉幣。 ○ひたちの國かしま大明神：常陸国鹿島大明神。
- うき雲の宮：「一、鹿島よりかせぎにのりて千早振三笠の山に浮雲の宮 鹿島より白鹿にのりて春日にうつり給ふ時、明神の御歌なり。浮雲の宮は末社にあらず、かしまのことなり」(『兼載雑談』) ○はか行：はかどる。 ○かしま立：鹿島立ち。旅行に出で立つこと。鹿島・香取の二神が、天孫降臨に先だち葦原の中つ国を平定した吉例に基づくことに拠るともいう。 ○けふまつるゝ：永久百首・春日祭・常陸・四八(③そのかみは、④みかさとともに)



(下13才)

(下12ウ)

(南円堂)

● ならの京になんぞんだうとて、じゆんれいくわんをんのれいぢやうあり。諸国の順礼御佛前にまふでうたをよみ、きせいして札をおさむ。たびのつかれをはらさんとて、たちやすらひ、やすみ居ける所に、所のものきたりて、よも山のはなしをする。じゆんれいかたりていわく、我はこれ、関東のもの成が、ながの道中して、此所にきたりぬ。此所ふちあんないに候へば、名所旧跡のこりなくおしへてたべと申に、所のもの、さらばかたりてきかせん。まづ、春日山、三笠の森、かしわ木のもり、はかい山、とぶ火のもり、佐保山、たむけ山、ふるのたき、みわの山、はつせ、天のかぐ山、みくなし山、そでふる山、すがたのいけ、よしの山、あをば山、あきつ野、かづらき山、たつた山、みむろ山、たつの市、かみなび、すがはらのふしみ、やしほ山などゝて、これより南東にあたりて山々の名所なりとぞおしへけり。

○よも山のはなし：四方山話。世間話。 ○ふちあんない：不知案内。

○おしえたべ：教えて下さい。 ○三笠の森：三笠山の森。 ○か

しわ木のもり：柏木の森、羽易山、飛火の森、佐保山、手向山、布留の瀧、三輪の山、初瀬、天の香具山、耳成山、袖振る山、菅田の池、吉野山、青葉山、秋津野、葛城山、立田山、三室山、辰の市、神奈備、菅原の伏見、やしほ山

